

わがふるさと

東伊豆町



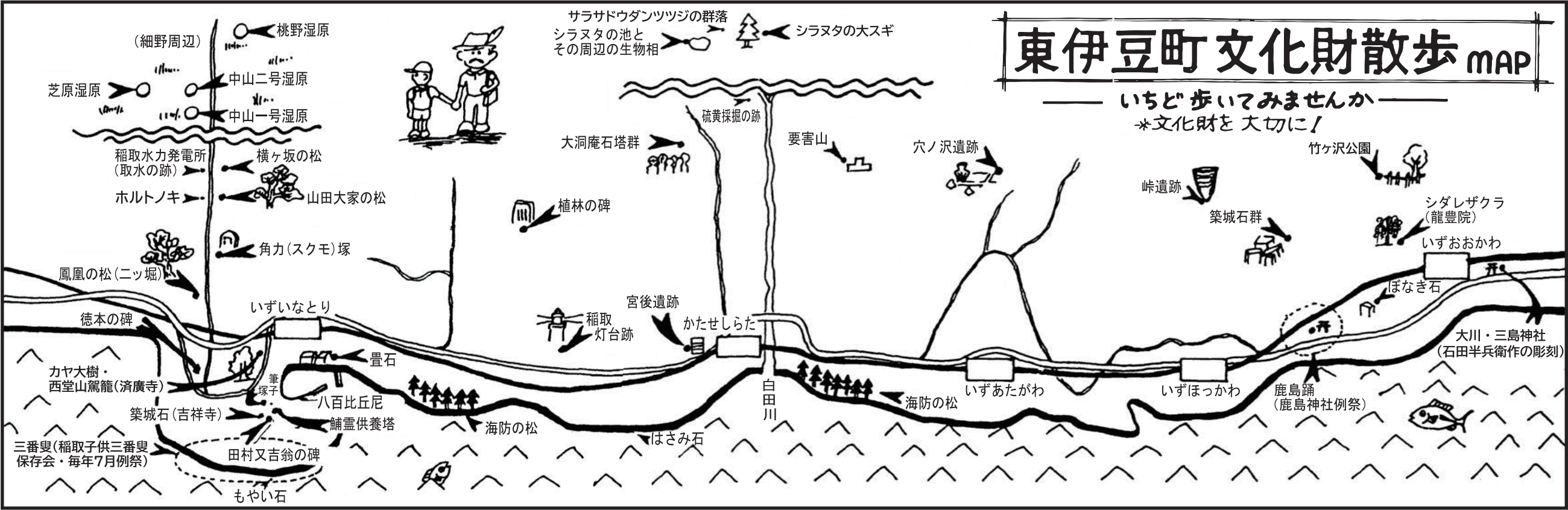
シラヌタの大スギ

(静岡県指定文化財 令和3年4月2日指定)

東伊豆町文化財散歩MAP

いちど歩いてみませんか

*文化財を大切に!



目次

一、東伊豆町文化財マップ

二、目次

三、わがふるさとの活用方法

四、東伊豆町の文化財

五、城東地区

(一) 大川・三島神社	5
(二) 大川・龍豊院のシダレザクラ	7
(三) 大川・ぼなき石	8
(四) 大川・築城石	10
(五) 大川区有文書	11
(六) 北川・鹿島神社の鹿島踊	14
(七) 奈良本・峠遺跡	16
(八) 奈良本・穴ノ沢遺跡	17
(九) 片瀬・海防の松	18
(十) 白田川の硫黄公害問題	19
(十一) 白田・大洞庵石塔群	22
(十二) 白田・金指家住宅	23
(一) 稲取灯台	24

六、稲取地区

(二) 稲取の築城石	25
------------	----

(三) 済庵寺	26
---------	----

(四) 鯨鮪霊供養塔	28
------------	----

(五) 舩石	29
--------	----

(六) 東区道祖神石像	30
-------------	----

(七) 稲取の子供三番叟	31
--------------	----

(八) 徳本上人の碑	32
------------	----

(九) 稲取の水力発電所の取水口跡	33
-------------------	----

(十) 東伊豆町の指定文化財の樹木	34
-------------------	----

(十一) 稲取の芝居引幕	36
--------------	----

(十二) 明治二十四年敷設の木製水道管	37
---------------------	----

七、東伊豆町の自然

(一) 細野湿原	38
----------	----

(二) シラヌタの池とその周辺の生物相	40
---------------------	----

(三) シラヌタの大スギ	41
--------------	----

(四) サラサドウダンツツジの群落	42
-------------------	----

(五) 奈良本「水神社の社叢」	43
-----------------	----

八、東伊豆町の偉人

(一) 木村恒太郎	44
-----------	----

(二) 木村弥吉	45
----------	----

(三)	田村又吉	46
(四)	西山五郎	47
(五)	太田米吉	48
(六)	萩原すげ	49
九、東伊豆町の昔話		
(一)	大川・石神大明神	50
(二)	北川・マミ穴のキツネ	51
(三)	奈良本・太田の大蟹	52
(四)	片瀬・龍淵院の「龍の枕岩」	54
(五)	白田・腰の神さま	56
(六)	はさみ石と仲鎮山	57
(七)	稲取・お舟石	59
(八)	稲取・はんまあさま	61
(九)	稲取・源為朝の旗	63
(十)	稲取・天下御免の旗	65
(十一)	稲取・市、ぼうされ	67
○	稲取細野高原の山野草	70
○	東伊豆町の遺跡と時代	72
○	東伊豆町埋蔵文化財包蔵地・指定文化財	73
	あとがき	76

わがふるさとの活用方法

東伊豆町教育委員会

ふるさととはいったいどういうものか、みなさんは考えたことがありますか。
みなさんの住む家、みなさんの通う学校、海や山などの自然、遊び場。何よりもたくさんの友だちがいて戻ってくるとほっとする、それがふるさとです。

この本には、みなさんが生まれるずっと前に、みなさんと同じように東伊豆町で過ごして大人になった人たちが残した知恵や道具、建造物など、私たちのふるさとについて多くのことが書いてあります。

学校の遠足に行ったり友だちと探検してみたりして、東伊豆町について調べて学んでください。そして、たくさん知って、もっともっとふるさと東伊豆町を好きになってください。

みなさんがふるさと東伊豆町を知り、好きになるためのガイドブックとしてこの本を使っていたただけたら嬉しいです。

東伊豆町の文化財

東伊豆町文化財保護審議会長 加藤 正通

「文化財」とは長い歴史の中で、人々の精神的なはたらきが加わって生み出され、現在まで守り伝えられてきた、文化的価値がある国民的な財産です。わが国には、「文化財保護法」という法律のもと指定、登録をおこない、貴重な文化財の保存を図っています。

文化財は種類別に①建造物や美術工芸品などの「有形文化財」②技術や伝統芸能などの「無形文化財」③地域の風習や行事、祭りなどの「民俗文化財」④自然の風景や希少な動植物などの「記念物」⑤人々の暮らしや生活の様子がわかる風景などの「文化的景観」⑥古い町並みや建物のまともを残すための地区の「伝統的建造物群保存地区」があります。この他に⑦文化財を残すための材料や補修する道具を作る技術や修理技術の「選定保存技術」⑧地中に埋まっている遺跡や土器などの「埋蔵文化財」があります。さらには、国

連のユネスコが採択する、世界遺産や無形文化遺産なども含まれます。

昭和二十五年八月に施行された「文化財保護法」は、平成三十一年四月の改正によって、保存の意味合いが強かったこれまでから、活用しながら保存をおこなう方向になりました。ただ、管理の面などからは多くの課題もあり、より良い保護のため、いつそうの対応が必要となってきました。

私たち町にも県指定四件、町指定二十六件の指定文化財があり、さらに未指定であつても、数多くの貴重な文化財も存在しています。文化財は町の歴史や文化のあかしでもあり、後世に伝え残さなければならぬものです。これから、身近な文化財に着目していただけたら幸いです。

東伊豆町の文化財について

文化財を知るために、東伊豆町の歴史を振り返ってみましょう。

東伊豆町に人が住み始めたのは、約四万年前といわれています。これは稲取の荒巻遺跡あらまきから旧石器時代きゅうせつぎの遺物が発見されていることからわかっています。

また、奈良本の峠遺跡とうげからは、約一万年前である縄文時代早期じょうもんの土器どきなどが見つかります。この遺跡は黒曜石こくようせきの石器の破片が多く出土していることから、伊豆七島の神津島こうづしまから運ばれてきた黒曜石を用いてナイフのような石器が作られていたと考えられています。

縄文時代の遺跡はこのほかに、大川から稲取までいくつも見つかっています。約二三〇〇年前からの弥生時代やよいの遺跡は、稲取で天神原遺跡などが見つかっています。

今から一七〇〇年前頃から奈良を中心としてこの国のもとがで始め、一三〇〇年前頃から国のかたちが整えられます。奈良時代に、この地は伊豆国賀茂郡河津郷に属していました。

た。この頃には、この地から都の奈良へ海で釣った鰹かつおを加工したものなどを運んでいたことがわかっています。

奈良時代、平安時代へいあんの伊豆は、鰹などの海産物がとれる国、船をつくる国などとして知られていました。また、都で刑罰をうけたり、戦いで敗れた人などが都から追放されたりする地でもありました。平安時代終りの保元元年ほうげん（一一五六年）に京都の都で起こった保元の乱で敗れた源為朝みなものためともは、伊豆の大島に追放になり、この後に為朝の子やその家臣が稲取に住んだと伝えられています。

平安時代の終わりに、平氏との戦いに勝った源頼朝みなものよりともが鎌倉かまくらに政治の中心となる幕府ばくふを置くことにより鎌倉時代となります。源頼朝は、その前に都で戦いに敗れて伊豆に住んでいたことから、この地にも頼朝についての話が八幡神社などに伝わっています。

鎌倉時代の後には南北朝時代なんぼくちよう、室町時代むろまちと続きます。

この時代のこの地の歴史を伝える史料は少ないですが、町内の神社に納められている棟札^{ふだ}などによりわかります。

室町時代の後半には日本の各地で戦いが起こる戦国時代^{せんごく}になります。戦国時代の伊豆は伊勢宗瑞^{いせそうざい}（北条早雲^{ほうじょうそう'un}）が支配します。北条氏が伊豆を支配すると、大川は桑原又三郎^{くわはらまたさぶろう}に代わって狩野大膳亮泰光^{かのうだいぜんのすけやすみつ}が治め、その他は北条氏が直接支配しました。また、一時期、片瀬と稲取は北条氏の家臣となった北条高広^{きたじょうたかひろ}の領地になったことがわかっています。

安土桃山時代^{あづちももやま}には徳川氏^{とくがわ}の領地となり、江戸時代になると大川村、奈良本村、片瀬村、白田村、稲取村の五ヶ村が成立します。この時、北川は奈良本村に含まれていました。江戸時代の初めには、江戸城の石垣の石（築城石^{ちくじょうせき}）が大川や北川、稲取などから切り出され、江戸に運ばれています。

明治時代^{めいじ}になると、この地は初め菰山^{こやま}県と菊間^{きくま}県になり、次に足柄^{あしがら}県に属し、明治九年（一八七六年）に静岡^{しずおか}県に入ります。明治二

十二年（一八八九年）の町村制により、大川村から白田村までの四ヶ村が合併して城東^{きとう}村となり、城東村と稲取村となります。大正九年^{たいしょう}（一九二〇年）に稲取村は稲取町となります。明治六年八月には、大川・奈良本・片瀬・白田・稲取に、寺を仮借して小学校が開校しました。

昭和^{しょうわ}三十四年（一九五九年）には城東村と稲取町が合併して東伊豆町となり、現在に至っています。このように東伊豆町は長い年月のなかで、さまざまな歴史を積み重ねてきています。

東伊豆町のさまざまな歴史や文化を知ることにより、文化財がどのように生まれ、伝えられてきたかを考えてみましょう。そして、この貴重な私たちの財産である文化財を未来に伝えていきましょう。

五、城東地区

(一) 大川・三島神社 みしまじんじや

棟札 むなふだ

町文化財 昭和六十三年四月指定

彫刻 ちようこく

町文化財 平成元年四月指定

国道一三五号線のすぐ上にある大川の三島神社は、大川を守る神社として信仰しんこうされています。神社の周囲しゅういからは縄文時代じようもんの土器どきや、古墳時代こふんの土師器はじきなどが出土しゅつどしていたり、ナギヤホルトノキなどの巨木があつたりするところから、昔から大川の中心として、神様を祀まつっていた場所と考えられます。

最初に神社が建てられた年はわかりませんが、社殿しゃでんや鳥居とりいなどを建て直した時の記録を示した棟札むなふだが残っています。一番古いものは室町時代むろまちの享徳三年きやうとく(一四五四年)のもので、当時、白田などこの地を治めおさていた加藤氏などによって建て直されたことが書かれています。明応九年めいおう(一五〇〇年)や大永四年だいえい(一五二四年)の棟札もあり、室町・戦国時代の記録として貴重なため町文化財に指定されています。

す。

大川の三島神社に祀られている神様は事代ことしろ主神ぬしのかみで、その左右には伊豆・箱根大権現だいこんげんが祀られています。

なお、三島市の三嶋大社では、事代主神とおおやまつみのみことふたはしら大山祇命おほやまつみのみことの二柱の神を三嶋大明神として祀っており、この三嶋大明神は伊豆の各地で祀られています。

現在の社殿は、嘉永六年かえい(一八五三年)九月に、村民六十八名等による寄進きしん三五〇両により建て直されたもので、社殿正面や脇障子の彫刻は見事で、これらの彫刻も町文化財に指定されています。

また、拝殿はいでんの天井てんじやうには建て直しの中心になり、多額の寄進をした大川村名主の木村恒右衛門つねえが詠んだ漢詩が書かれています。この詩は中国の昔の国であつた夏が、堯ぎやう・舜しゆん・禹うの三代の王によって栄えたことを詠み、大川村がずっと栄えることなどを祈つたものです。



大川・三島神社 社殿正面彫刻



側面彫刻 左：張飛 右：關羽

(二) 大川・龍豊院りゅうほういんのシダレザクラ
町文化財 昭和五十四年七月指定

大川の龍豊院は、室町時代むろまちの終わりの弘治元こうじ年（一五五五年）に真言宗のお寺として創立そうりつされました。その後荒廃こうはいしていたのを、永祿えいりくの初め頃（一五六〇年頃）、伊豆市大見の最勝院さいしょういん七代の師笑山精真和尚おしょうが来て、山号を大川山、寺号を龍豊院として曹洞宗そうとうしゅうに改めました。

お寺の歴史などは明治十二年（一八七九年）に火事があり、建物をはじめ多くのものが燃えもてしまったため、詳しいことはわかりませんが、お寺の境内けいだいには樹齢約四〇〇年といわれるシダレザクラの古木があります。

このシダレザクラは、木の高さが約八メートル、根の周りは約五・五メートルあり、樹齢だけでなく、木の形や枝の張り具合も見事です。花はひとつの花が咲く単弁花たんぺんかで、四月になると新緑しんりよくの若葉とともに、薄いピンク色の花を咲かせます。

この木の幹には、火事の時の焼け跡が残って

いたため、静岡県しずおかの天然記念物として文化財に指定されなかったと言われています。また、お寺は明治十七年（一八八四年）に再建さいけんされました。



（三）大川・ぼなき石

町文化財 昭和五十五年七月指定

大川の真崎まさきの旧国道一三五号線から海岸へ下る道（旧東浦路ひがしうらじ）の脇わきに、「ぼなき石」と呼ばれる直方体に切られた大きな石があります。この石は江戸城の石垣いしがきを築くために切り出され、石垣の角かどに積まれたので、角石すみいしと呼ばれている築城石ちくじょうせきです。

江戸幕府が江戸城を築き始めたのは、江戸時代初めの慶長九年（一六〇四年）からで、三代將軍の徳川家光の寛永十三年（一六三六年）まで続けました。そして、幕府はこの大きな事業を各地の大名に命じました。

大川村には、たくさんの大名が大勢おおぜいの石工いしくを連れて、築城石を切り出しにきました。そのため、米のとぎ汁で川が白く濁にごったといわれています。

この「ぼなき石」には「羽柴左衛門大夫はしばさえもんだゆう」の文字と、二羽の雁かりが飛とんでいる「丸に二つかりがね紋」が彫ほられています。羽柴左衛門大

夫とは、安芸国広島城主（四万八千石）の福島正則ふくしままさのりのことで、大川と北川の間の山中から築城石を切り出していました。

ところが、福島正則は幕府に許可なく城を改築かいちくした理由で、元和五年（一六一九年）に信濃国高井郡と越後国魚沼郡（四万五千石）に転封てんぽうになり、寛永元年（一六二四年）に亡くなったので、広島城主の時に切り出されたものと思われます。

福島正則が大川から築城石を切り出したことは、当時の熊本城の城主である細川家の文書に書かれています。また、大川区有文書にも、何人かの大名から大川の村名主に「福島正則が切った石を欲しい。」とか、「江戸へ運ぶように。」との手紙が残されています。

この「ぼなき石」については、次のような話が伝えられています。

山中から切り出された石を港まで運んできましたが、途中でびくとも動かなくなり、今の場所にそのまま残されました。

その後、いつの頃からか夜になると「ボワ

ー、ボワー。」という泣き声に似た声が聞こえてくるようになりました。村人が泣き声をたどっていくと、なんと動かなかった大きな石から泣き声が聞こえてくるではありませんか。この石が夜になると「江戸へ行くのはいやだ、いやだ。」と泣きだすという話は、村人の間にすぐに広まりました。それから、この大きな石を「ぼなき石」というようになったとのこと。

その他にも、築城石を切り出すために遠く離れた広島から、大川の山中まで連れてこられ、過酷な仕事をさせられていた石工たちが故郷の家族を思い出して泣いたことを伝えているといわれています。

また、慶長五年（一六〇〇年）の関ヶ原の戦い以来、徳川家のために尽くしてきた福島正則が転封されたのを「ぼやいた」ために、「ぼやき石」が転じて「ぼなき石」と呼ばれるようになったともいわれています。



(四) 大川・築城石(角石)すみいし

町文化財 昭和五十五年七月指定

大川では、「ぼなき石」を切り出した安芸国広島藩
だけでなく、尾張国名古屋藩や筑後国柳川藩など、
多くの藩が江戸城の築城石を切り出したことがわか
っています。

大川の谷戸山には、「ぼなき石」のような江戸城石
垣の角に積まれた角石や、運び出されなかった石な
どがたくさん残されています。

また、楠郷山の南斜面には、⑤の刻印が彫られた
築城石が残されており、「大川の大角石」として、町
文化財に指定されています。

この大角石は、伊豆東海岸に残された中では最大
級のもので、長さは三・一三メートルと「ぼなき石」
の約一・六倍の大きさです。刻印から、九州の日向
国延岡藩の有馬左衛門直純が慶長年間に切り出し
たものと思われます。



(五) 大川区有文書

町文化財 平成二十九年四月指定

大川公民館には、江戸から昭和時代の区有文書がおよそ三二〇〇点所蔵されています。

古い文書は虫に食われたり、湿気により腐ったりして読めない部分がありますが、大川区が大切に保管し、村の人々の生活の様子や歴史が刻まれている貴重な記録です。

江戸時代の文書はおよそ二五〇点あり、一番古いものは、江戸時代前期の元和・寛永年間（およそ四〇〇年前）に、江戸城石垣の普請を命じられた大名や旗本から大川村名主の飯田助左衛門に宛てた八通の手紙です。

元和六年（一六二〇年）の手紙は、二名の旗本から「有馬直純の残した石二〇〇個を江戸へ運ぶように。」と、寛永十二年（一六三五年）の手紙では、九人の大名が連名で「石丁場を引渡すように。」と命じています。

築城石を切り出した地元からこのような文書が発見されたのは、全国的にも珍しいこと

です。

天明四年（一七八四年）の飢饉の時は、「稲が不作のために来年の苗を作る種籾が無く、買う金も無いので貸してほしい。」と役所へ嘆願書を出しています。

文化十二年（一八一五年）九月には、北川から赤沢までの海岸を大川村が測量した記録帳があり、第九次伊能忠敬測量隊が下田から伊東方面に向けて測量した二ヶ月前のことです。

嘉永五年（一八五二年）には、時宗総本山藤沢遊行寺の遊行上人が江戸幕府の朱印状を持ち、大勢の僧を連れて念仏布教の旅の途中、大川村に宿泊しました。

この時、大川村には「馬五〇頭、人足五〇人を用意するように。」との先触が来ていました。が、大川村だけでは用意できないため、稲取村から大川村までの村役人が奈良本に集まり相談したことや、代官所から役人を派遣するという文書もあります。

また、江戸時代の大川村の様子がよくわかる村絵図十一枚や、領主に納める国役金・運上

金等の受取証、その他、村内で起きたいろいろな出来事が書かれた文書も残されています。

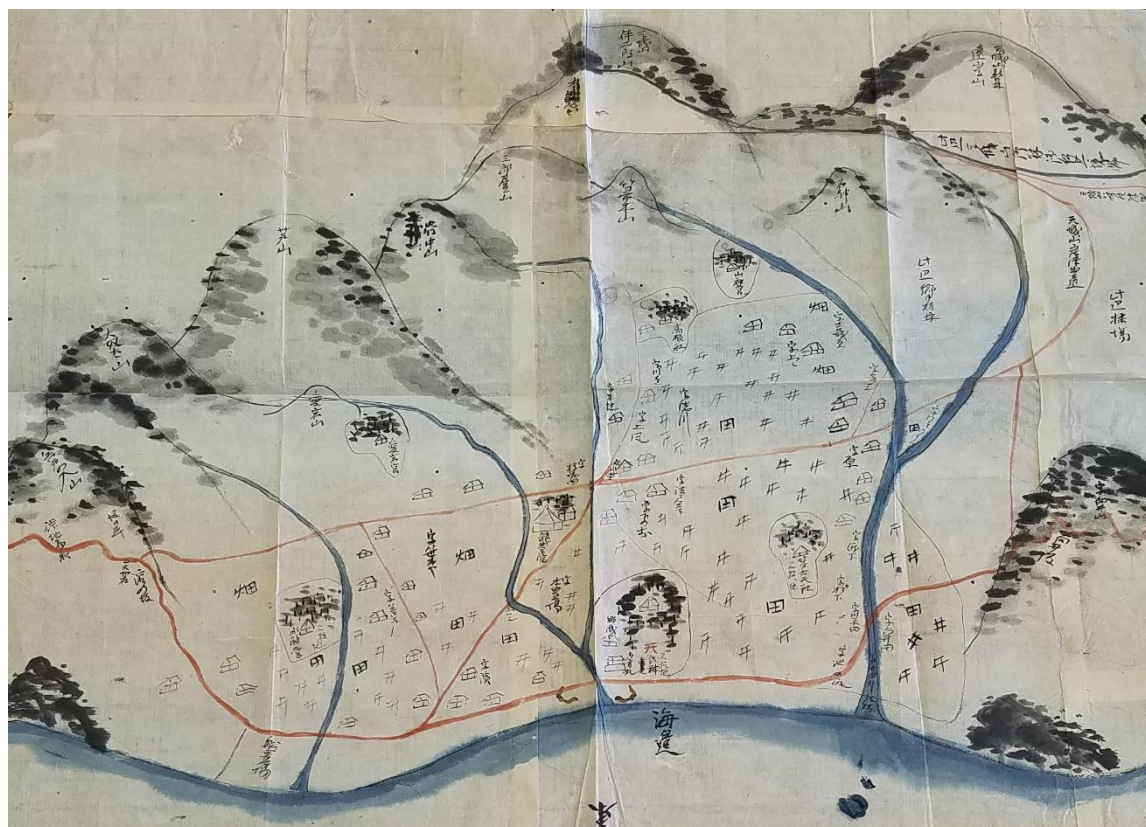
三年の「暁鐘新報」等の新聞が保存されています。

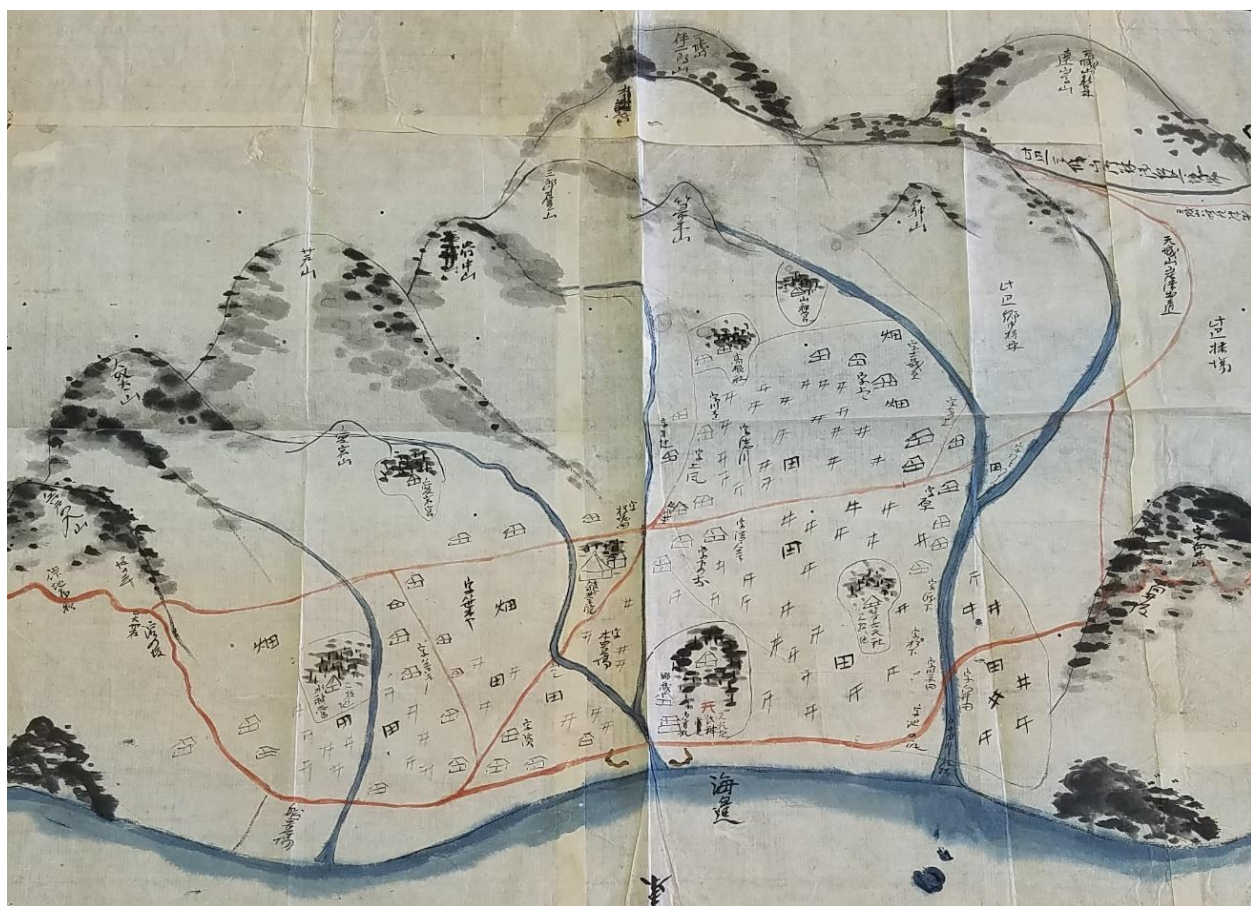
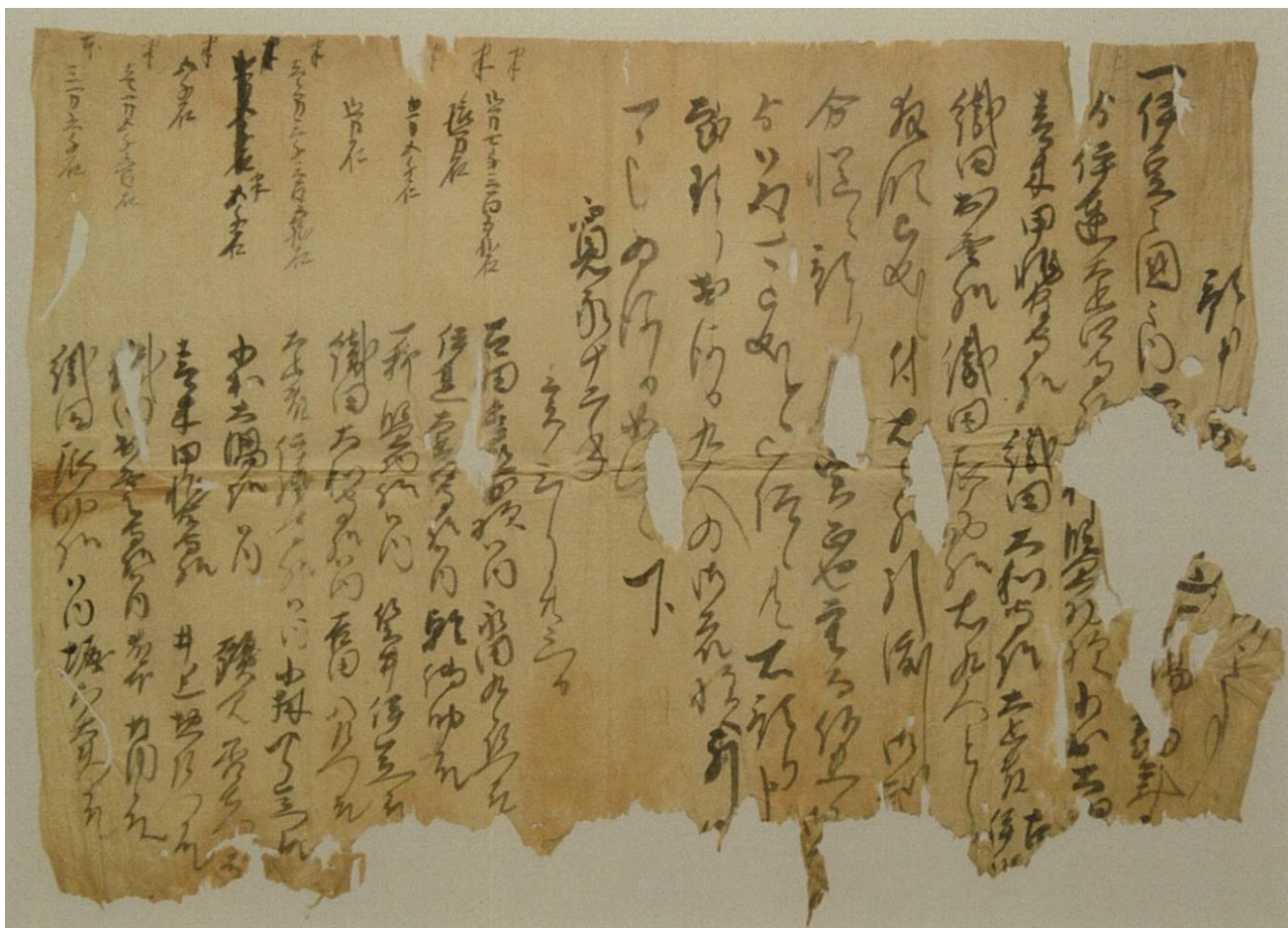
明治時代の文書は一八〇〇点を超えており、その多くは地租改正に伴う測量図、国・県・郡役所・村役場からの布達や通知等ですが、学校関係では、大川学舎（枕流舎）が明治六年八月十八日に開校した日からの出席簿、明治十年の大川学舎や奈良本学舎・片瀬学舎の時間割表、明治十二年には稲取村から富戸村までの九ヶ村で小学校へ通えた子供と通えない子供の数を調査し、県へ報告しています。

明治二年には、白田村硫黄鉾の「硫黄採掘差止願」を国や県に出したこと、明治十年の「稲取村々会規則」、奈良本村や片瀬村の徴兵検査の名簿等も保管され、近隣の村々の様子もわかります。

また、明治初期には全国的にコレラが大流行したため、明治十二年には賀茂郡にコレラ患者が入らないよう、伊東方面からの旅人を消毒する検疫所が大川村に設けられました。

これらの文書以外にも、明治二十二〜二十





(六) 北川・鹿島神社の鹿島踊

町文化財 昭和五十四年七月指定

北川にある鹿島神社は、北川を守る神様を祀る神社です。神社が建てられた年などははつきりとわかりませんが、室町時代終わり頃の天文十二年（一五四三年）に建て直したことを書いた棟札があつたとされています。このことから、少なくともこの年より前から神社があつたと考えられています。

鹿島神社に祀られている神様は、武甕槌命です。この神様は、茨城県鹿嶋市にある鹿島神宮などで祀られており、日本の東の地を守る神様として信仰されています。

鹿島神宮では、正月などに占いが行なわれ、その結果が「鹿島の事触れ」と呼ばれる人により、各地に伝えられました。この人たちは占いの結果を伝えるときに踊りによって人を集め、神社のお札などを配ったそうです。このときの踊りが「鹿島踊」であるといわれています。

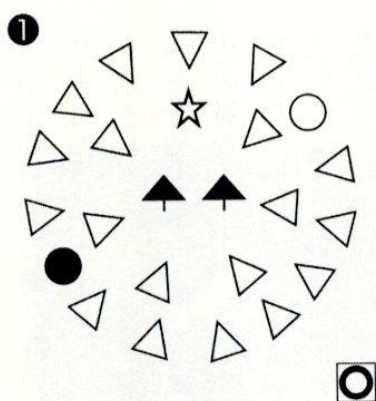
「鹿島踊」は、今では鹿島神宮やその周りでは踊られていません。今、「鹿島踊」が伝わっているのは、神奈川県の小田原市から熱海市、伊東市などの海に面したところにある神社です。その中で、北川は南の端にあり、北川より南では踊られていません。

踊りは、各地で少しずつ違いますが、北川の踊りは歌を歌う人を中心に円形になって踊る「ま踊り」と、正方形になって踊る「さ踊り」があります。この「さ踊り」と「ま踊り」を歌に合わせて順番に踊っていきます。また、「さ踊り」から「ま踊り」に変わるときに直角に向きを変えます。北川の「鹿島踊」は、お祭りの前夜（十月二十六日）と、お祭りの日（十月二十七日）に踊られています。

北川などの東伊豆地方で踊られている「鹿島踊」は、大変めずらしいものであり、平成十七年（二〇〇五年）に国から「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選ばれています。



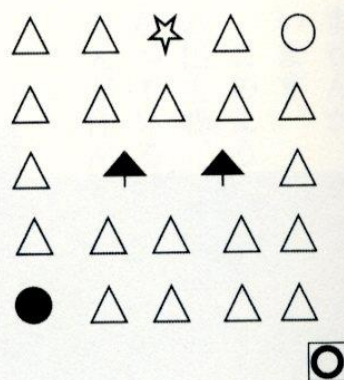
北川鹿島踊隊形図



〈マオドリ1〉

立ち上がって右回りに踊り始める。シャクは中の円に移動し、ウタアゲは円心で歌う。

②



〈サオドリ1〉

ウタアゲは移動せず歌う。シャクは右回りに踊り、ウタアゲの後ろに来ると踊り手の間を割って正面に飛び出す。シャクが飛び出すと、ほかの踊り手は5列に並び替える。

(七) 奈良本・峠遺跡^{とうげいせき}

峠遺跡は、奈良本と北川の境^{さかい}あたりにある遺跡です。この遺跡は、天城^{あまぎ}の山々から続く峰^{みね}の先に位置し、高さ一八〇メートルほどの台地にあります。ここからは、大島をはじめとする伊豆七島の島々が良く見えます。今ではこの遺跡の大部分は、住宅の分譲地^{ぶんじょうち}となり、住宅などが建っています。

この場所に遺跡があることは、昭和^{しょうわ}の初め頃からわかっていましたが、正式な調査は行われていませんでした。昭和二十五年（一九五〇年）に初めて調査が行なわれましたが、周辺に畑が作られていたことから、限られた範囲^{はんい}の調査でした。

昭和六十二年（一九八七年）から平成三年（一九九一年）にかけて四回にわたる本格的な発掘調査^{はつくつちようさ}が行なわれています。この調査では、今から約九〇〇年前である縄文時代早期から約六〇〇年前である縄文時代前期の

人が住んだ跡や道具などが出土しています。出土した道具は、食事の煮炊^{にた}きなどに使われた土器^{どき}の破片^{はへん}や、黒曜石^{こくようせき}で作られた弓矢^{ゆみや}の先の鏃^{やじり}などです。とくに鏃などの黒曜石から作られた石器が数多く出土していることから、ここには伊豆七島の神津島^{こうづしま}から運ばれてきた黒曜石から鏃などの石器を作るために多くの人が住んでいたことがわかっています。



(八) 奈良本・穴ノ沢遺跡 あなのさわいせき

町文化財 昭和五十四年七月指定

穴ノ沢遺跡は、奈良本の穴ノ沢にあり、今から約九〇〇年前の縄文時代早期から人が住んでいたことがわかっています。穴ノ沢は、高さ約一六〇メートルで南を向いているので暖かく、近くには湧き水が出るなど人が住むには適した場所であったと考えられます。

昭和四十年（一九六五年）に丸鉄園にあつた池を掘っていたとき、食事の煮炊きなどに使われた土器の破片や弓矢の先である鏃を作る黒曜石などが出てきました。このことから、この場所が昔、人が住んでいた遺跡であることがわかりました。

昭和五十九年（一九八四年）には、狭い範囲での発掘調査が行なわれ、縄文時代早期からの土器の破片や石器など約二〇〇点と、お墓と考えられる穴である土抗が三つ見つかっています。この土抗は、縦約一メートル、横約

五十センチ、深さ約三十センチの楕円形をしていました。また、何に用いられたかわかりませんが、石を並べたものなどが発見されています。

このような狭い範囲の調査から非常に多く出土物、土抗、石を並べたものなどが見つかっていることから、この遺跡周辺には多くの人が住んでいたと考えられています。



(九) 片瀬・海防の松かいぼうまつ

町文化財 昭和五十四年七月指定

平成二年

解除

片瀬や稲取の向井むかいの海岸にある松は、「海防の松」と呼ばれています。「海防の松」とは、江戸時代に外国船が日本に近づくことを心配した幕府が、寛政五年（一七九三年）に海に面した場所に松を植えることを命じたものです。海岸に松を植えることにより、外国船から村の様子などを見えなくしたのです。

江戸時代の日本は、オランダなど限られた国の船しか日本に来ることができないと決まていました。しかし、江戸時代の中頃からロシアなどの外国船が日本に近づいてくるようになりしました。

松を植える命令を出したのは、老中（江戸幕府で將軍を助ける役職）だった松平定信まつだいらさだのぶです。松平定信は、命令を出した年に約四〇〇人のお供ともを連れて伊豆を見て回っています。松平定信やこのお供は、三月二十八日に片瀬に宿泊していますが、人数が多いため、稲取

や白田なども分かれて泊まったと伝えられています。

また、片瀬の海防の松は、昔からの言い伝えから「はりつけの松」とも呼ばれています。残念ながら松くい虫の被害を受けたため、平成二年（一九九〇年）に町の文化財指定から外されました。



(十) 白田川の硫黄公害問題

日本で最初の公害問題と言え、明治二十四年（一八九一年）に栃木県の国会議員である田中正造が国会で訴えた足尾銅山の鉱毒事件が有名です。しかし、これよりもっと昔に白田川に硫黄が流れたことを訴えた公害問題がありました。この白田川の硫黄公害を訴えたことは、日本でもっとも古い公害問題であるともいわれています。

白田川の上流には、硫黄ヶ窪とよばれる硫黄が採れる場所があります。硫黄は火薬の原材料になり、マッチができる前は火をつけるため使われました。このため江戸時代から明治時代にかけて、白田川上流の硫黄を採るための許可の願いや、それに反対する文書が多く残されています。

元禄十四年（一七〇一年）頃から白田川に硫黄が流れ出たために白田や片瀬の水田に硫黄で汚れた水が入り、稲が育たないことがあ

りました。また、この頃から魚も釣れなくなつたために問題となり始めました。硫黄を採ることの中止を求める最初の訴えは、寛延二年（一七四九年）にこの地を治めた代官に文書が出されています。

この硫黄公害が再び問題となるのは、江戸時代が終わりに近づく文政九年（一八二六年）からです。この頃外国船が盛んに日本に近づいて来るようになり、外国船を近づけないためなどに火薬が盛んに作られました。このため硫黄が多く採られたのです。

文政九年から稲取村をはじめとする伊豆東海岸の村々は、白田川上流での硫黄を採ることの中止をたびたび訴えています。元治元年（一八六四年）には、十二の村の代表者が名前を書いて、みんなで訴えています。また、慶応三年（一八六七年）にはこの十二の村で、硫黄を採ることに協力した村には魚を釣ることを許さないという大変厳しいことを決めて、中止を訴えています。

明治時代めいじだいいになると、硫黄を採ることは国が中心となって進めるようになります。これによって伊豆の東海岸の村々は硫黄を採ることの中止を訴えなくなりますが、稲取だけは江戸時代と変わらず訴えています。

明治十一年（一八七八年）には、稲取だけが今の静岡しずおか県知事けんちにあたる人に硫黄を採ることを認めないように求める文書を出しています。しかし、国は明治十八年（一八八五年）に白田川上流で硫黄を採ることを認めました。これに対して稲取では、七八七名の人が名前を書いて、当時の国の担当する大臣だいじんに中止を訴えています。

この後、硫黄を採ることの中止を訴える文書は残っていません。また、明治三十五年（一九〇二年）には白田川上流で硫黄を採らなくなりしました。こうして日本でもっとも古いともいわれる白田川の硫黄公害問題は終わりを告げました。



《硫黄山採掘願いと反対運動》



(十一) 白田・大洞庵石塔群 だいどうあんせきとうぐん

町文化財 平成元年一月指定

白田の湯ヶ岡ゆがおかにある高羽家たかはの庭先には多くの石でできた塔があります。戦いに敗れて亡くなつた人をまつた塔であるといわれたり、腰の病気を治してくれると信仰されたりしています。

多くの石塔は、ばらばらになつた部分を新たに積みなおされたものです。中ほどにある大きな石塔は、ほぼ元の形ですが、これも一部が積みなおされています。石塔は、鎌倉時代かまくらじだいから作られ始め、形などから一三〇〇年代からその後には建てられたと考えられています。

どうしてこの場所に多くの石塔が建てられたかはわかっていません。しかし、この場所には、白田にある普応寺ふおうじがもととあつた場所であると考えられています。また、大川おおかわの三島みしま神社じんじやを建て直したことを書いた享徳三年きやうとく（一四五四年）の棟札むなふだには、白田を治めた人が神社の建て直しに関わつたと書いてあり、明応めいおう

九年（一五〇〇年）の棟札にも「白田御代官」しらだおだいかんとあります。このことから、白田にこのあたりを治める人が住んでいたことが分かります。石塔は、このような人が建てたものであるとも考えられています。



(十二) 白田・金指家住宅

県文化財 昭和三年指定

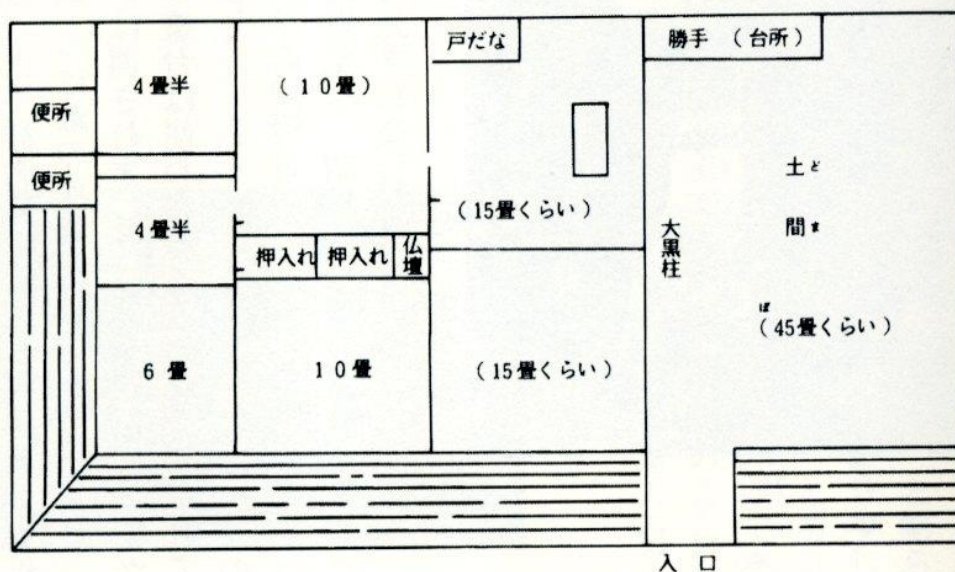
昭和五年解除

白田の金指家は昔から白田に住み、長く続いた家でした。その家はいつ建てられたかわかりませんが、金指家の先祖の金指大炊助おおいのすけがこの地に住み着いたときに建てられたと伝えられています。

場所は白田港から国道に上る細い道の途中にあり、建物の大きさは、間口まぐちが約二十一メートル、奥行きおくゆが約十メートルと、大変大きなものでした。家の造りつくりは特別な飾りなどはありませんが、大きな木材を使い、手斧ちやうなで削った跡がはっきりと残っていました。

この家は、今からおよそ四〇〇年以上前の大きな家の特徴がよく伝えられています。このため、昭和三年（一九二八年）に静岡県の文化財に指定されました。しかし、残念ながらこの家は昭和五年（一九三〇年）九月二十四日の火事で焼けてなくなっていました。

かな ざし け こ けん ちく あと
金 指 家 古 建 築 跡



六、稲取地区

(一) 稲取灯台^{いなとりとうだい}

町文化財 昭和五十七年九月指定

稲取のトモ岬^{みさき}の沖^{おき}は、船の事故が起こりやすい場所で、漁民から大変おそれられていました。

明治^{めいじ}二十五年（一八九二年）に稲取の漁民の代表である鈴木常右エ門^{つねう えもん}らは、トモ岬に灯台を建てることを計画しました。何度か国などに灯台を建てるお願いをしましたが、計画は受け入れてもらえませんでした。そこで、自分達で灯台を建てることを決めました。

みななどお金を出し合い、石運びなど村人が協力をして、明治四十二年（一九〇九年）十二月に灯台が完成しました。灯台の建設には、当時のお金で八〇五円がかかったと伝えられています。灯台ができたことにより、灯台からの灯は漁船のよい目印となり、事故を

起こす船が少なくなりました。

しかし、太平洋戦争^{たいへいようせんそう}中であつた昭和十七年（一九四二年）に敵の攻撃の目印になるとして、灯台の灯は消されました。戦争が終わってもこの灯台は使われることがなく、荒れてしまいました。しかし、その後、町は村人の協力によりこの灯台が建てられた価値を認め、文化財に指定し、昭和六十年（一九八五年）に灯台が復元されました。



(二) 稲取の築城石（畳石）

町文化財 昭和五十五年七月指定

築城石とは、城を建てるための石垣や土台に使われる石のことです。江戸幕府を開いた徳川家康は、慶長九年（一六〇四年）から江戸城の石垣を築くため、築城石を江戸に運ぶことを多くの大名に命令しました。東伊豆町には、このときに築城石を切り出した場所である石丁場の跡が大川、北川、稲取などに多く残っています。

稲取の石丁場は、黒根岬へ行く途中の磯脇、水下の愛宕神社のある愛宕山、志津摩海岸から山に入った本林などにあります。また、稲取の街なかにもこのときに切り出された築城石がいくつか残っています。

街なかにある築城石では、向井の栗田家の前にある二つの大きな築城石（角石）が町の文化財に指定され、この二つの築城石は、「畳石」と呼ばれています。ちなみに、「畳石」の

呼び名は栗田家の屋号であるともいわれています。

西側の石は、長さが約三メートルあり、石の横に「御進上 松平土左守 十内」と彫られています。東側の石は、西のものより少し小さいですが、横に「進上 土左守」とあります。「松平土左守」とは、今の高知県である土佐藩の二代藩主である山内忠義のことです。このことなどから稲取には土佐藩の石丁場があったことがわかっていきます。



(三) 濟廣寺さいこうじ

カヤ 県文化財 昭和四十年指定
駕籠かご 町文化財 昭和五十四年指定

稲取の大畑おおばたけにある濟廣寺は、安土桃山時代あづちもはやまじだいの天正てんしょう(一五七三年～一五九一年)年間に今の場所に建てられたといわれています。もとは入谷いりやの山田やまだにあり溪松庵けいしょうあんと呼ばれていました。たが、お寺が遷うつるときにお寺の呼び方も今の濟廣寺に変わったと伝わっています。

このお寺の境内けいだいの右手には大きなカヤの木があります。この木は、根の周りが約六メートルあり、木の高さは約十八メートルある大変大きなものであり、樹齡じゅれいは約七〇〇年以上ともいわれています。カヤでこれだけ大きなものは、静岡県でもめずらしいため、県の天然記念物に指定されています。

このお寺の十五代目の住職じゅうしよくである的州禪師てきしゅうぜんじ

は、お寺の本山ほんざんで鎌倉かまくらにある建長寺けんちやうじで十年間以上にわたる厳しい修行しゆぎやうに励みしました。

これが認められ、文久三年ぶんきゅう(一八六三年)に西堂さいどうという大変高いお坊さんの位をもらいました。このお坊さんが稲取に帰ってきたときに乗ってきた駕籠がお寺に二台あります。

ひとつは町を通るときに乘る化粧駕籠けしやう(町駕籠)で桐きりの木を使ってきれいに作られています。もうひとつは山越えなどに使う山駕籠やまで化粧駕籠に比べて軽く、山道などを越えるのに便利にできています。

的州禪師てきしゅうぜんじがこれらの駕籠に乗り、お寺に戻ったときに持ってきたものに御判物箱ごはんものばこがあります。御判物箱とは、將軍などから受け取った大切な文書を入れる箱であり、この箱の両側には將軍家の印である葵あおいの紋があります。また、このお寺の檀家だんかの人がビルマ(今のミャンマー)の独立に協力したこと、ビルマの国の宝である釈迦しやかに如来像やビルマの豎琴たてこなどがお寺の宝物館にあります。

済廣寺のカヤ

○場所	稲取
○樹齡	約七〇〇年以上
○高さ	十八メートル
○枝の広さ	東西南北に約十七メートル
○根まわり	六メートル
○目通り	五メートル

静岡県でもめったにない大きな木と言われている、県指定天然記念物になっています。



(四) 鮪^ほ霊^{れい}供^{いく}養^{よう}塔^{とう}

稲取の田町区公民館のある所は、十王堂^{じゅうおうどう}ばらいと呼ばれていましたが、ここに鮪霊供養塔が建っています。鮪霊供養塔の「鮪」とは、イルカやクジラなどの大きな魚のことであり、漁で獲られたイルカやクジラなどの霊を供養するために建てられた塔です。

この塔の高さは、約一・二メートルあります。塔が建てられたのは文政十年（一八二七年）ですが、台が建てられたのは安政二年（一八五五年）です。どうして塔と台が建てられた年が違うかは、はっきりわかっていません。しかし、これは弘化^{こうか}四年（一八四七年）の六月十七日に台風のような大きな時化^{しけ}があり、このときの大きな波によって台などが流されたのではないかと考えられています。

イルカやクジラなど大きな魚を獲る漁は、伊豆では稲取をはじめ東海岸の川奈^{かわな}、西海岸の安良里^{あらし}など各地で行われました。この漁は、

沖でイルカやクジラなどの群れを見つけると船で港に追い込み、若者などが海に飛び込んで捕らえるものです。このように漁は、若者を中心となつて行なわれるので、台石に稲取の浜三区の若者の代表者の名前が刻まれており、この漁の様子を伝えています。供養塔は、伊豆では川奈や安良里にもありますが、稲取のものが最も古いものです。



(五) 舳石^{もやいし}

町文化財 昭和五十五年七月指定

舳石とは、船が流されないように、港になぎとめておくための石のことです。昔、稲取の漁業が大変盛んであったころ、この石が使われたといわれています。

舳石は、今は三つ残っていることがわかっています。その三つは、役場前の港に面した広場に置かれています。

この石は、いづろ石に穴を開け、舳石として使い始めたかわかっていません。イルカの追い込み漁に使われたとも言われていますが、はつきりしません。

稲取では、大正時代^{たいしょうじだい}（一九一二年～一九二五年）にマグロ漁が盛んであり、多くのマグロを釣る^{なわふね}縄船がありました。縄船とは、マグロを釣るために、一本の長い縄に適当な間隔をおいて多くの針をつけた糸をつけた延縄漁^{はえなわりよう}をする船のことです。この船は、夏には船揚場^{ふなあげば}

に船を揚げていますが、その他のときにこのような舳石につながれていたと考えられます。



(六) 東区とうそじんの道祖神でんやお(伝八はつびやく百比丘尼びく)石像せきぞう

町文化財 平成二十六年十月指定

東伊豆町の各地には、石造りの神様の像がまつられています。この神様は、道祖神や塞さいの神とよばれています。村の境さかいなどで外から悪いものが入らないようにまつられていました。が、やがていろいろな願いごとが祈られるようになりました。

東区道祖神の三体のうち、真ん中の石像は手に椿つばきを持っているといわれています。今ではよくわかりませんが、この石像の昭和初期の写真が民俗学者である折口信夫博士の著書『古代研究』国文学篇こくぶんがくへんに載っています。折口博士は、この石像が手に椿をもつことから八百比丘尼の石像であるといっています。

八百比丘尼とは、長生きをした尼僧にそう(女性のお坊さん)のことであり、次のような伝説があります。昔、不老長寿ふろうちようじゆの薬とされる人魚の肉を誤って食べた娘が、いつまでも歳としをと

らず、長生きをしました。夫おつとをはじめ多くの家族を亡くした娘は、亡くなった夫や家族を弔とむらうために尼僧となり、各地に椿を植えたと伝えられています。

伊豆の東海岸の道祖神は、石から一体の石像を丸ごと彫り出す「伊豆型道祖神」といわれるめずらしいものです。この石像は、そのなかでも他に同じような形のない大変めずらしいものです。



(七) 稲取の子供三番叟^{いなとりさんばそう}

町文化財 昭和五十四年七月指定

稲取の祭りは、七月中ごろに四区の五つ神社のお祭りを同じときに行ないます。そのなかで稲取全体を守る神様として信仰されている八幡神社のお祭りで演じられるのが、稲取の子供三番叟です。八幡神社のお神輿^{みこし}が浜のお飯屋^{かりや}へ行く「お下り^{くだ}」の前後と、お神輿が神社に戻る「お山入り^{やまい}」の前の三回演じられます。

三番叟とは、室町時代の舞である能の演目^{のう えんもく}「翁^{おきな}」をもとにした舞です。三番叟の「叟^{そう}」とは、お年寄りのことで、舞のなかで千歳^{せんざい}、翁、三番叟（稲取では黒面^{くろめん}と呼ばれています。）の三人のお年寄りが演じることや、三番目に演じる三番叟の舞から全体の呼びかたになつたといわれています。

伊豆では、大川^{おおかわ}をはじめ各地のお祭りでは三番叟が演じられていますが、稲取の三番叟は

笛以外の全員を子供が演じることが特徴です。明治時代^{めいじじだい}の中ごろまでは大人が演じていたようですが、その後から子供が演じるようになりしました。昔から三番叟を演じる子供は「神の子^{かみこ}」と呼ばれ、健康に育つと信じられてきました。

稲取でいつから三番叟が演じられようになったかは、はっきりわかっていません。江戸時代の終わりに河津^{かわづ}の見高^{みだか}に來た歌舞伎^{かぶき}の役者^{やくしや}さんから教わったとも伝わっています。



(八) 徳本上人の碑

稲取小学校の西門前にある諏訪神社の前に
はいくつかの石造物があります。この中でひ
ときわ大きな碑には、独特な字で「南無
阿弥陀仏」と彫られています。この碑は、江
戸時代に伊豆を回った徳本上人という有名な
お坊さんの教えを伝えるものです。

徳本上人は、宝暦八年（一七五八年）に今
の和歌山県に生まれ、お坊さんとなって厳し
い修行を続けました。その後、江戸（今の東京）
の一行院のお坊さんとなり、各地に教えを広
めて回りました。

徳本上人が伊豆を回ったのは、文化十二年
（一八一五年）のことです。下田の人達の招
きで下田、伊東、熱海などの伊豆の東海岸を
回っています。稲取では九月十一日に東区に
ある正定寺で教えを広めています。

徳本上人の教えは、「南無阿弥陀仏」を唱え
ることで、亡くなった後に阿弥陀仏によつて

天国にあたる極楽に行くことを祈るもので
この教えが各地に広まりみんなで「南無阿弥
陀仏」の念仏を唱える講と呼ばれる集まりが
できました。

この教えを広めるために石に「南無阿弥陀
仏」を刻んだ徳本上人の碑が伊豆の各地に建
てられました。稲取と奈良本のは、文政
二年（一八一九年）に建てられ、片瀬と白田
のものはその前の年に建てられています。



(九) 稲取の水力発電所の取水口跡

町文化財 平成元年四月指定

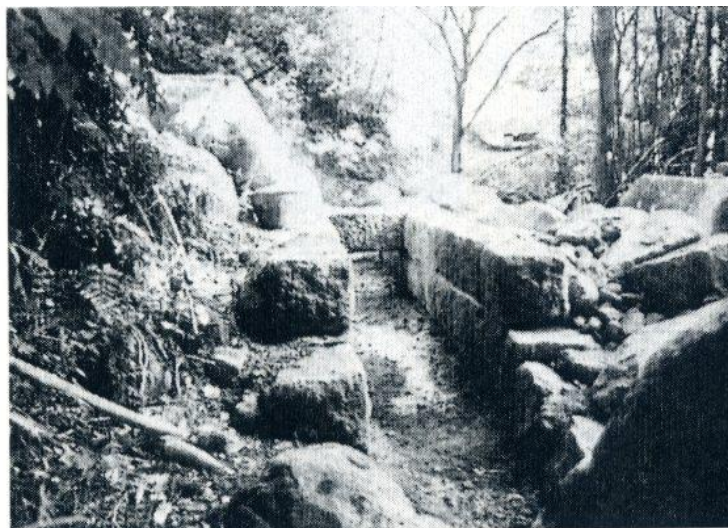
稲取では、明治四十四年（一九一一年）に初めて電灯がともされました。稲取の約九〇〇戸の家庭のうち、四一二戸が電気を引き、それまでの石油ランプより明るく、火事の心配もないために人々は喜んだそうです。稲取が電気を引いたのは、静岡県内では、十一番目であるともいわれています。

明治時代に入り、各地で徐々に電気が引かれるなかで、稲取では明治四十四年に医者であつた西山五郎にしやまごろうなど数名がお金を出し合い、稲取水力電気株式会社いなとりすいりよくでんきかぶしがいしやをつくるために出し合つたお金は、当時のお金で二万五千円です。

水力発電所は、志津摩川しづまがわの上流に建てられ、ドイツのシーメンス社製の高性能の発電機が備え付けられました。水を七十二メートルの落差から落とす水力を用いて、二十八キロ

ワットの電気を発電しました。会社は、大正六年（一九一七年）に河津の会社に営業を移しましたが、水力発電は昭和十六年（一九四一年）まで続きました。

水力発電の水の取り入れ口の跡は、入谷いりやの赤松神社あかまつじんじやの裏にあります。しかし、残念ながら今は水路の石積みの大部分は崩れてしまい、一部しか残っていません。



(十) 東伊豆町の指定文化財の樹木

東伊豆町には、文化財に指定されている樹木がいくつかあります。

静岡県が指定しているものは稲取の済廣寺さいこうじのカヤ（昭和四十年指定・写真P 27）、シラヌタの池近くにあるシラヌタの大スギ（令和三年指定・写真P 41）です。

また、東伊豆町の指定であるものは大川の龍豊院りゅうほういんのシダレザクラ（昭和五十四年指定・写真P 7）、天城あまぎの万二郎岳ばんじろうだけのふもとにあるサラサドウダンツツジの群落（平成元年指定・写真P 42）などがあります。

これ以外にも東伊豆町が文化財に指定している樹木がいくつかあります。東伊豆町が文化財指定としている樹木は次のとおりです。

* 横ヶ坂よかさかの松

- ・ 場所 稲取 山田家
- ・ 指定 昭和五十四年七月

* 山田やまだ大家のおおやの松

- ・ 場所 稲取 山田家
- ・ 指定 昭和五十四年七月

* 鳳凰ほうおうの松

- ・ 場所 稲取 田村家
- ・ 指定 昭和五十四年七月

* ホルトノキ

- ・ 場所 稲取 八代家
- ・ 指定 平成元年四月



ホルトノキ



鳳凰の松



横ヶ坂の松



山田大家の松

(十一) 稲取の芝居引幕 いなとり しばいひきまく

町文化財 昭和五十六年三月指定

稲取に伝わる芝居の引幕は、横が約十メートル、縦が約三・五メートルの大きな幕です。幕には、おめでたい七人の神様として信仰されている七福神の絵が描かれています。また、左上に「稲取若衆中」、右上に「志ん上」「進上」をあらわす、右下に江戸日本橋の十六軒の魚問屋の店名が書かれています。

贈られた年などは書かれていないのでくわしくはわかりませんが、この幕は江戸時代終わり頃に今の東京である江戸の魚問屋から稲取の若者たちに贈られたものです。

引幕にある魚問屋のなかには、稲取出身の人の店名もあります。その頃の稲取は、たくさんの魚が採れ、この魚などを江戸の問屋に送っていたといわれています。この引幕は、このような稲取と江戸の魚問屋との強いつながりを今に伝えています。



(十二) 明治二十四年敷設の木製水道管

町文化財 平成二十六年十月指定

明治二十二年（一八八九年）の町村制が定まり、今の東伊豆町は城東村と稲取村の二つの村になりました。当時の稲取村で初めて村長に選ばれたのが、田村又吉です。又吉は、道路や港を整備し、小学校校舎の建設準備などに取り掛かります。このような又吉の村長としての業績の一つが、村に水道を敷いたことです。

当時の稲取村は飲み水がよくなかったため、コレラなどの伝染病に苦しんでいました。又吉は伝染病がひろがることを防ぐために水道を敷くことを決意します。また、これには又吉が稲取村に迎えた帝国大学（今の東京大学）出身の医者である西山五郎からの助言がありました。

稲取村は、村の北東部を流れる沼津川の上流を水源として八〇〇間（約一四五四メートル）

ル）の水道を敷き、七個の水槽を置いて飲み水としました。「近代水道百年の歩み」（日本水道新聞社出版）によると、明治時代に初めて水道を敷設したのは明治二十年（一八八七年）にできた横浜であり、稲取はこのわずか四年後にできています。

稲取村は、早くから水道を敷設したことなどから、明治三十八年（一九〇五年）に日本の「模範村」として代表的な三つの村のひとつに選ばれています。また、又吉はこの業績などから藍綬褒章という勲章を受けています。



七、東伊豆町の自然

(一) 細野湿原 ほそのしつげん

県文化財 平成八年三月指定

八十〜二十万年前の火山活動によって造られた天城連山^{あまぎれんざん}は、長い間、浸食^{しんしょく}などによって大きく削り取られています。稲取^{いなり}の三筋山^{みつじやま}なども天城連山の一部と考えられており、その南東部は浸食されたことによつて緩やかな高原ができました。これが、細野高原です。

細野高原の一部は稲取泥流^{いなりゆう}と呼ばれる水はけの悪い粘土質の土石流に覆われています。そのため高原の窪地には水がたまりやすく湿原ができました。湿原のなかでも比較的大きい中山^{なかやま}一、二号、芝原^{しばはら}、桃野^{ももの}の湿原は県内でも数少なくなつた貴重な植物が生育している湿原であり、県の文化財に指定されています。

これらの湿原には、モウセンゴケ、ミミカキグサ、タヌキモなどの食虫植物や、カキラシ、アサヒラン、トキソウなどのラン科の植

物等多くのめずらしい植物をみることができます。また、サクラスミレ、ヒメハツカ、イズコゴメグサなどの絶滅の恐れのある貴重な植物^{せいいく}が生育しています。

湿原を囲む百数十ヘクタールの草原は昔から春になると山焼きが行われ、ススキの草原が守られてきました。毎年、山に火を入れることにより、草原から悪い虫などを追い払い、外から木々が入ってくるのを防ぎ、ススキを守りました。昔、ススキは家畜のえさや、畑の肥料などにしたり、屋根を葺くのに使われたりしました。

このススキ草原にもいろいろな草原植物が見られます。春から秋にかけてキジムシロ、スマイレ類、オカオグルマ、ササユリ、キキョウ、オミナエシ、カワラナデシコ、リュウノウギクなどの花々が咲き誇ります。

また動物も多く、チョウの仲間、トンボ類、草原を餌場^{えさば}としているオオタカ、ノスリなどの猛禽類^{もうきんるい}、セツカ、ホオアカ、ヒバリなどの草原の小鳥なども観察されます。



芝原湿原



桃野湿原



細野高原

(二) シラヌタの池とその周辺しゅうへんの生物相せいぶつそう

県文化財 昭和四十六年八月指定

モリアオガエルの生息地として知られている「シラヌタの池」は、片瀬・白田海岸から天城の万三郎岳の南の斜面に向かって十二キロメートルほどの深い山の中にあります。このあたりは川久保川の上流で、山の中のゆるやかな谷のような形をしています。

以前は、天城火山の噴火口の跡であるといわれていました。今では、八十〜二十万年前の噴火でつくられた地形であり、地すべりなどによってできた窪地に水がたまったと考えられています。

このような特徴のある地形は、特別な自然環境をつくりだし、めずらしい動植物が数多く生息する場となっています。周辺の森林には、県文化財に指定されている「シラヌタの大スギ」(写真P41)といわれる木があります。また、ケヤキなどの大きな木もあり、自然豊

かな生物相を見ることが出来ます。シラヌタの池とその周辺は、開発など人の手が入っていない自然豊かな場所です。私たちの町にこのような自然豊かな場所があることは、みんなが知り、伝えたい場所のひとつです。



(三) シラヌタの大スギ

県文化財 令和三年四月指定

シラヌタの大スギは、自然林内の山道を上りつめた先、やや緩やかな斜面に生育しています。その容姿は威風堂々とした独特の自然樹形で、長い歳月の育みを物語っています。樹齢一〇〇年以上ともいわれる大スギは、隣接する樹木と共生しながら、今もなお力強く、樹勢を維持しています。また、大スギは林野庁の全国の国有林を対象とした「森の巨人たち百選」にも選定され、文字どおり伊豆半島を代表する大木で、周辺の自然環境も含め、後世に残さなければならぬ貴重な財産です。

○所在地

東伊豆町大字奈良本字天城山奈良本入奈良本国有林内

○形状寸法



目通り 約八・五メートル
根廻り 約十・五メートル
樹高 約四十メートル
枝張り 東西約二十二メートル
南北約二十三・三メートル

(四) サラサドウダンのツツジの群落

町文化財 平成元年四月指定

西天城を含めた天城の山々には、ツツジ科のドウダンツツジの仲間としてサラサドウダン、チチブドウダン、ドウダンツツジの三種類が自生^{じせい}しています。このうちドウダンツツジは庭木や生^いけ垣^{がき}として植えられていますので、よく見ることが出来ます。

しかし、サラサドウダンやチチブドウダンは、山の尾根すじや山頂近くの中腹に行かないと見ることはできません。サラサドウダンは、高さ四〇六メートルの落葉小高木^{らくようしょうこうぼく}で、五月ころには鐘形^{しょうけい}の花を多くつりさげます。この花は十ミリ程の大きさで白色または淡黄色で虹色のすじがあり、先端は淡紅色を帯びます。

このサラサドウダンのツツジのめずらしい大きな木が、万二郎岳^{ばんじろうだけ}の南側の山の中腹（一部国有林内）に自生しており、平成元年（一九

八九年）に町の天然記念物に指定されました。

一番大きな木は、根回り一六二センチメートル、目通り一メートル、樹高五メートル、枝張りも東西四四〇センチメートル、南北五六〇センチメートルもあり、それは見事なものです。その周りにも素晴らしいサラサドウダンが何本もあります。しかし、残念ですが、標高一一九〇メートル付近の急な山の斜面にあるので、簡単には行くことができません。

また、このサラサドウダンのツツジの群落は、伊豆森林管理署も価値のある植物群落として平成三年（一九九二年）に「万二郎ドウダンツツジ植物群落保護林」に設定しています。



(五) 奈良本「水神社の社叢」
すいじんじや しやそう

奈良本を守る神様をまつる水神社は、熱川駅より約一キロメートルの山あいにあります。

奈良本の街並みが始まるあたりの、天城山あまぎさんから流れ下る濁川にこりがわの西側の川べりです。水神社の森である社叢は、静岡県「ふるさと自然百選」の「お宮の森」にも選ばれているみごとな森です。また、山神が勧請かんじようされた永享二年えいきよう（一四三〇年）の木札が残っています。

面積は一ヘクタール程度とあまり広くはありませんが、高さが二十メートルを超える大木が多く、こんもりと茂っています。その中でも、社殿そばのスタジイの大きな木は目通りが六メートルを超え、訪れる人々を驚かせています。

また、この社叢の特徴は、高さが中くらいの木や低い木が少なく、高い木が多くを占めていることです。ヒノキやケヤキを除くと、スタジイやクロガネモチ、タブノキなどの照しょう

葉樹ようじゆがその主な木です。

このように、神社の森である社叢は、今ではあまり見られなくなった森の姿を残しています。水神社の社叢は、古い時代の様子を見ることが出来る大変めずらしい森であるといわれています。



八、東伊豆町の偉人

(一) 木村恒太郎 ― 伊豆のために活躍

木村恒太郎は木村恒右衛門とも言い、天保七年（一八三六年）に大川に生まれました。恒太郎の家は、大川村の村長にあたる名主を代々務める家でした。恒太郎は小さい頃から勉強ができ、十三歳の時には現在の東京である江戸に出て勉強をしました。

十九歳の時に、お父さんが亡くなったため大川に戻り、名主の役職を引き継ぎました。

明治五年（一八七二年）には、第五大区四小区（稲取り富戸までの九ヶ村）の副区長兼学区取締となり、小学校設立に努力しました。

また、明治九年（一八七六年）一月には足柄県会議員となりましたが、四月に足柄県がなくなり静岡県（現在の静岡県ではない）となると、第九大区（現在の熱海市・伊東市・下田市・賀茂郡と旧中伊豆町）の初代大区長となりました。八月には、浜松県を編入して現在の静岡県ができ、明治十二年（一八七九年）三

月には第一回静岡県会議員選挙が行われ、恒太郎は当選しました。

その間、人を育てるには高い教育が必要と考え、南伊豆の大野恒哉や山本謙吾、松崎の依田佐二平などと協力して、明治十二年には私立豆陽学校（今の下田高校）を開校させました。

また、伊豆の発展のために交通を便利にしようと、明治十五年（一八八二年）には依田佐二平と協力し、西伊豆から東伊豆をめぐり、東京とを結ぶ海運会社を作りましたが、明治十九年（一八八六年）には多くの人々に惜しまれながら亡くなりました。



中央：木村恒太郎

(二) 木村弥吉 — 農業や観光に貢献

木村弥吉は、明治十七年（一八八四年）に今の伊豆の国市大仁おおひとの農家に生まれました。小学校卒業後に米屋で働いていましたが、二十歳で日本とロシアが戦った日露戦争にしろせんそうが始まり、戦争に行きました。

戦争が終わってから大川に移り住み、農業を始めました。はじめは人から借りた土地で農業をやっていましたが、一所懸命に働いて少しずつ自分の土地を増やしていきました。そのようなあるとき、弥吉は大川の海に面した陽だまりに、春に実るはずのサヤエンドウが普通より早い十二月に実っていることを見つけました。

弥吉は、これを作ればよく売れると考え、早く実るサヤエンドウを育て、東京の市場に送りました。市場ではお正月用の野菜として、大変高いお金で売れました。このように他の産地より早く作れるサヤエンドウは、よく売

れてお金になったことから「成金豆なりきんまめ」と呼ばれました。

また、弥吉は明治四十一年（一九〇八年）に熱川に移り住み、小さな温泉旅館を始めました。そのころの熱川は、温泉はありませんでしたが、旅館は数軒しかなく、さみしいところでした。しかし、温泉に入れる弥吉の旅館は、多くの人が泊まるようになりました。こうして熱川温泉は、今のような観光地になったのです。

弥吉は、成金豆と熱川温泉という二つのものを有名にして昭和三十三年しょうわ（一九五八年）に亡くなりました。



(三) 田村又吉 — 模範村をつくった村長

田村又吉は、天保十三年（一八四二年）、稲入谷の農家に生まれました。明治二十二年（一八八九年）に稲取村の初めての村長になります。村長としての又吉は、天草の干し方を研究したり、植林をしたりして村を豊かにすることに努めました。

また、道路や船揚場などを作ったり、伝染病を防ぐために水道を敷いたりしました。その他にも小学校の校舎や病院の建設に取り掛かるなどとても優れた業績を残しています。

明治二十五年（一八九二年）に村長を辞めてからは、入谷に農家の組合を作り、みんなでお金を出し合って助け合うようにしました。

また、みかんの栽培や、蚕を飼うことなどに力をいれ、農家の収入が増えることを目指しました。教育にも力をいれ、その頃の稲取小学校の校長であった太田米吉と相談をして、入谷に青年の男・女、成人、老人などの勉強

の会を作り、学校教育以外の社会教育や家庭教育を広めることに努力しました。

このような又吉の取り組みは広く知られるようになり、明治三十七年（一九〇四年）には藍綬褒章という勲章を受けました。又吉は日本中で有名になり、各地に出かけて、稲取村での活動について講演をして回りましたが、大正元年（一九一二年）、講演に出かける途中、病気のため天城で亡くなりました。



福建視察団集合写真より抜粋

(四) 西山五郎 にしやまごろう

―伝染病とたたかった医者 でんせんびょう―

西山五郎は、元治元年（一八六四年）、今の東京四ツ谷の漢方医の家に生まれました。明治二十二年（一八八九年）に今の東京大学医学部を卒業しましたが、いろいろな事情で河津町見高の真乗寺にいました。

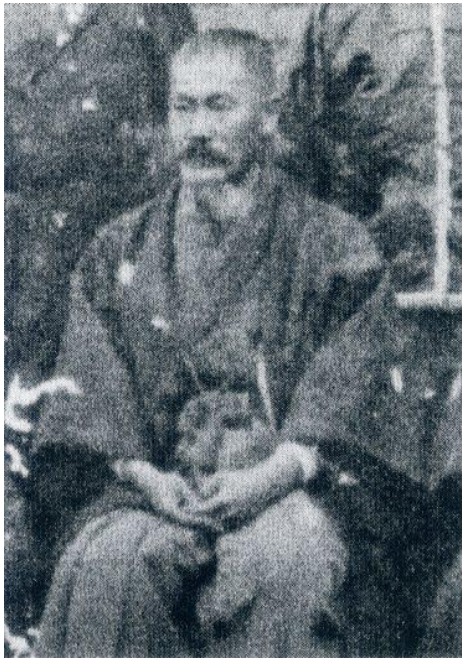
稲取村の初めての村長となった田村又吉などは、すぐに西山のところに行き、稲取で医者になることをお願いしています。明治二十三年（一八九〇年）に西山は、稲取で医者になることを決め、稲取村も西山のために病院や家などを建てるなど協力をしました。

西山が取り組んだことは、コレラなどの伝染病を退治することです。稲取は昔から飲み水がよくなかったので、伝染病に苦しんでいました。大学で西洋の医学を学んでいた西山は、飲み水がよくないことに気づき、水道を敷くことを考えます。稲取村は、沼津川ぬまつかわを水源として八〇〇間（約一四五四メートル）の

木製の水道を作りました。

また、五十尻いそじりに避病院ひびょういんを建て、伝染病にかかった人を入院させて伝染病がうつらないようにしました。

西山は、医者の仕事だけでなく、若者たちに楽しみが少ないのをみて、東京の青梅おうめから「無言おどり」を伝えました。これが稲取の夏祭りで踊られる「ばかばやし」です。西山のこのような人柄は、稲取の子供から大人まで広く尊敬を集めました。昭和十五年（一九四〇年）に亡くなりました。



福建視察団集合写真より抜粋

(五) 太田米吉 — 教育による村づくり

太田米吉は、嘉永六年（一八五三年）に奈良本の農家に生まれました。十三歳で今の東京である江戸に出て住み込みで働きましたが、二十歳のとき病氣になり奈良本に帰ってきました。このときに家の農業を手伝いながら、夜はお寺で一所懸命に勉強をしました。

米吉は勉強ができたことから、明治十年（一八七七年）に御殿場で小学校の先生になりました。先生になってからも勉強を続け、今の静岡大学教育学部にあたる静岡師範学校に入學し、先生としての指導力を学び、高めました。そのため米吉がすばらしい先生であることは、多くの人に知られるようになりました。

稲取村の初めての村長であった田村又吉は、この話をきいて米吉に稲取小学校で教育にあたってもらうことをお願いしました。こうして明治二十五年（一八九二年）に校長として稲取小学校に来ることになりました。

稲取小学校の校長となった米吉は、子供たちの教育に一所懸命に取り組みました。また、人を育てることは、小学校だけでは十分ではないと考えて、又吉などと力を合わせて、人のための社会教育や家庭教育の勉強会を開くなど学校以外の教育にも取り組みました。毎月の勉強会には必ず出て、米吉のすばらしい話にみんな感心したといわれています。米吉は校長を辞めた後、大正七年（一九一八年）に亡くなりました。



福建視察団集合写真より抜粋

(六) 萩原すげ ― 日本初の女性灯台守

萩原すげは、明治二十七年（一八九四年）に白田に生まれました。すげの家は、稲取と白田の峠でお茶などを出す茶店をやっていた。すげは、お母さんの実家がある今の富士宮市の小学校に通い、卒業後に服をぬう裁縫の先生の家に住み込んで働きました。

大正三年（一九一四年）に両親と白田に戻りましたが、これより前の明治四十二年（一九〇九年）にはトモロ岬に灯台が建てられていました。この灯台には灯台を管理する灯台守がいなかったのです、すげのお父さんが頼まりました。しかし、お父さんは年をとっていたので、すげが代わりに灯台守をやることになりました。

灯台守になるためには、資格が必要であったため、すげは下田まで灯台守になるための勉強に通うことになりました。電車やバスなどない時代でしたから、稲取から下田までの

往復約五十キロメートルを歩いて通ったのです。まだ日が出ない午前三時に家を出て、午前九時半に下田に着き、昼食をはさんで四時間の勉強をしました。午後三時半には下田を出て家に着くのは夜であり、これを八日間続けて資格をとったそうです。

すげは、戦争のため昭和十八年（一九四三年）に灯台の灯が消されるまで約三十年間にわたって灯台を守り、平成二年（一九九〇年）に九十六歳で亡くなりました。



九、東伊豆町の昔話

(一) 大川・石神大明神いしがみだいみょうじん

大川を流れる向田川むかいだがわを山の方へ向かって五キロメートルほど登っていくと、川の水がたまつて深くなつた淵ふちがあります。この淵には高さが十五メートルほどもある切り立った岩があり、この大きな岩の下には石神神社いしかみじんじやが祀まつられていたと言われています。この神社のとなりには石神大明神が祀られ、この石神大明神には次のようなお話が伝わっています。

昔、大川では子供がいなくなつてしまふ「神隠しかみかく」がよくありました。かくれんぼをしていた子供たちが何人かなくなつてしまつたとのこと。いなくなつた子供の家では、村の人にお願いをして、あちこちを探しますが、神隠しにあつた子供は見つかりませんでした。

あるとき、たいへん勇気がある、ある家の主人しゅじんが「隠されたなら、必ず隠した者がいる

はずだ。おれがそいつを探しだしてやる。」といつて、あちこちを探しまわりました。向田川をさかのぼり山奥まで入っていくと石神神社にたどり着き、この神社がありがたいと思つて、神社まわりを探し回りました。

そんなある日の夜、主人は大きな蛇へびの夢を見ました。夢の中で大きな蛇は「神隠しにあつた子供は、おれが食べてしまつた。もう、こんな悪いことはしない。これから病氣にかかつた子供を助けてやるから、もう探さなideくれ。向田川の山奥に石神大明神として祀つてくれたら、病氣の子供を助けてやる。」と主人に語りました。

次の日、主人は村人にこの話をして、石神神社のとなりに白蛇を石神大明神として祀ることにしました。それから、大川では「神隠し」がなくなり、村人は子供が病氣になると、この石神大明神におまいりをして病氣をなおしてもらつたとのこと。

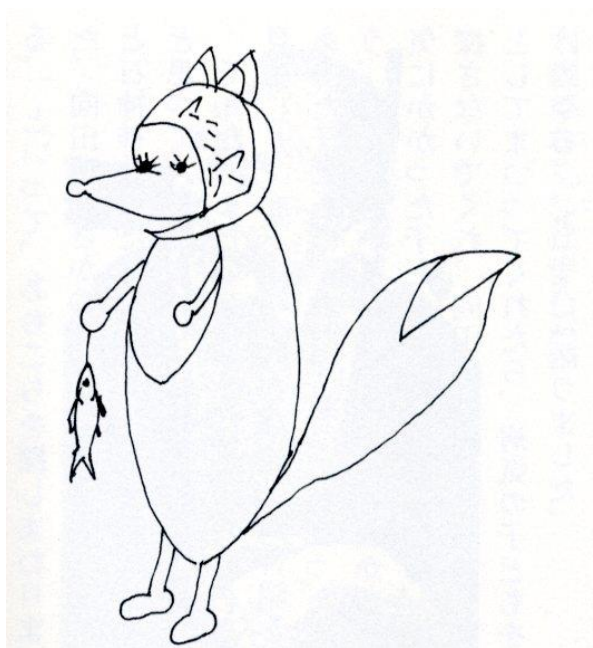
(二) 北川・マミ穴あなのキツネ

昔、北川から大川に行くのも、奈良本に行くのも、道はひとつしかありませんでした。この道に出るには、「南無阿弥陀仏なむあみだぶつ」と書かれた碑ひが立っているマミ穴の場所を通っていかねければなりません。このマミ穴のあたりは大変さみしいところで、夜になるとキツネが出てきては、人を化ばかしたとのことです。このマミ穴のキツネには、次のようなお話が伝わっています。

あるとき、村人が伊東に出かけたのですが、帰りが夜になってしまいました。お土産みやげの魚を肩にかつぎ、ろうそくを手にとってマミ穴のあたりに来ると、誰かがあとをつけてくるような気がしました。急いでふり向いて、あたりを見回しましたが、誰もいません。

ほつとして、そのまま歩いて行くと、今度は声がするではありませんか。「ろうそくをおくれ。魚をおくれ。」と声が聞こえてきました。

村人はびっくりして、かついでいた魚を放り出し、ろうそくを置いて、一目散いちもくさんに家まで走って逃げました。こんなことがあってから、北川では夜に歩く人はいなくなりました。また、いたずら好きのマミ穴のキツネは、夜にだます人が出てこなくなったので、いつのまにかいなくなつたとのことでした。



(三) 奈良本・木大田の大蟹おおたのおおがに

奈良本の熱川小学校の先あたりは、大田と呼ばれています。ここには「蟹かにが森もり」といわれた森があり、この森には蟹かにが祀まつられていました。ここに蟹かにが祀まつられていたことについては、次のようなお話が伝わっています。

昔、大田がまだ池だったころのお話です。池にたまった水は、入赤川いりあかがわに流れ、村の田んぼの稲作りに使われていました。この入赤川には、「大田の大蟹」といって、二十畳じゅうじょうぐらいの大きな甲羅こうらをした蟹かにが住んでいました。ふだんは見ることもない大蟹でしたが、稲が実る秋の夕ぐれになるとどこからかやって来ます。あらわれた大蟹は、村人たちが作った稲を大きなはさみでばっさばっさと切り倒してしまふのです。ときには、田んぼに大きな穴をあけるので、稲作りができなくなることもありました。「ゆうべ大蟹が出て、吾作ごさくさんちの稲はぜんぶ切きられてしまったそうだ。」

「となりの田んぼは、大きな穴をあけられてよ。」と、大蟹が出た次の日は、村中が大騒ぎです。しかし、あまりにも大きな蟹のため、その仕返ししかえをおそれて、村人たちはどうすることもできません。それでも、度重たびかさなる大蟹のいたずらに村人たちは腹を立て、今度こそ大蟹をこらしめてやろうと話し合いました。そして、村のなかで一番力持ちの作兵衛さくべえを先頭に大蟹の退治たいじに出かけました。

ところが、退治に出かけた村人たちは大蟹を見ただけで恐ろしくなり、みんな家に逃げ帰りました。それから、大蟹を退治しようとする者はあらわれません。村人たちの困った様子ようすを見た村の長おさである太郎左衛門たろうざえもんは、大蟹を退治できないかと悩んでいました。太郎左衛門は、しばらく考えているとすつくと立ち上がり、家に伝わる宝である弓矢ゆみやを持って大田の池へ出かけていきました。

太郎左衛門は、池に着くと木のかげにかくれ、大蟹を待ちました。そのうちに、なまぐ

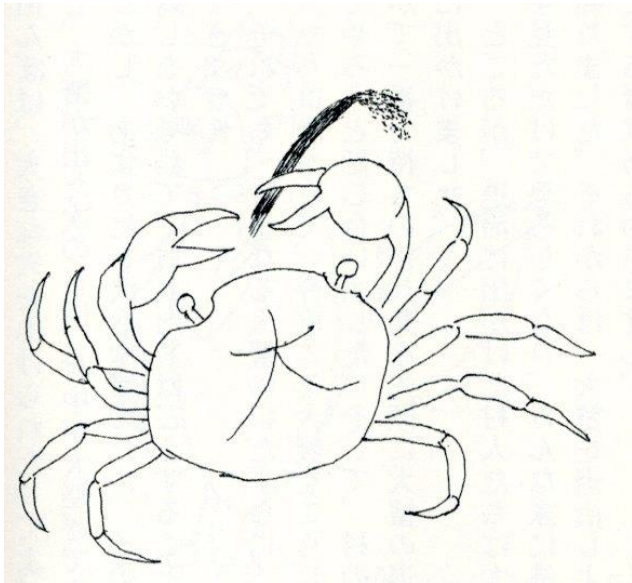
さいにおいとザワザワという音とともに大蟹があらわれました。太郎左衛門は、「今度こそ、村人たちのために、大蟹を退治してやるぞ。」と、大蟹をめがけ、力の限り弓を引きしぼり矢を引き放ちました。矢はみごとに蟹の甲羅に突き刺さり、二本目の矢も突き刺さりました。矢が刺さった大蟹は、夜明けまで苦しみ、ズシンと音を立てて倒れると死んでしまいました。

次の朝、ゆうべ大きな音がした大田の池に来てみた村人たちは、みんなびっくりしました。あの憎い大蟹が池にたおれて死んでいるではありませんか。それを見て、驚いて腰を抜かす者までいました。

ところが、大蟹のまわりには何百、何千というたくさんの子蟹がむらがり、大蟹の死を悲しんでいました。村人のなかには、まだ大蟹をたたこうとする者もいましたが、太郎左衛門は「憎い蟹とはいえ、子蟹からこんなに慕われているのを見るとかわいそうだ。もう死

んでいるのだから、たたくのはやめよう。」と
いって、やめさせました。

それから、太郎左衛門と村人たちは、森に蟹の祠を建てて蟹を祀り、そこを「蟹が森」と呼びました。また、奈良本の人たちは、かわいそうな子蟹のことを思い、今でも子蟹をとって食べないとのことでした。



(四) 片瀬・龍淵院の「龍の枕岩」

片瀬のお寺である龍淵院は、鎌倉時代の弘安元年（一二七八年）に隆興というお坊さんが開いたといわれています。このお寺は、今は大沢山にあります。昔は龍が住んでいる池の淵にあつたと伝わっています。この言い伝えが、お寺の名となったといわれ、またお寺にはこの龍が枕にしたといわれる大きな岩があります。この岩には、次のようなお話が伝わっています。

昔、伊豆には、太郎、次郎、三郎の三人の兄弟の山が並んでいました。この山には、葉っぱが甘茶に使われる甘茶の木がたくさんありました。この「甘茶の木」がなまって、山は「天城」と呼ばれるようになったともいわれています。

天城の山にはシラヌタの池があり、そこには大きな龍が住んでいました。この龍は甘茶の葉が大好きで、いつもたくさんの甘茶の葉

を食べていました。あるとき、龍は葉を食べ過ぎて喉が渴いたので、天城の三兄弟に話しかけました。

「おれは甘茶の葉っぱを食べ過ぎて、喉がカラカラだ。シラヌタの池の水では足りない。どこかに水のたくさんあるところはないものか。」すると、三兄弟は「山のずっと下の方にホウキガ原が見える。そこは大きな池のようになっている。シラヌタの池よりずっと大きいぞ。」と答えました。

それを聞いた龍は、大急ぎで山をくだり、下にある池に着きました。この池の近くにはホウキガ原と呼ばれる原っぱが広がっており、龍の寝床にぴったりだったので、龍はここに住むことにしました。また、龍は近くの大沢山に大好きな甘茶の木を見つけたので、たいへん喜びました。

ところが、ある日、ドカーンという大きな地響きがありました。

おどろいた龍が天を見上げると、なんと富士の山が火を噴いて（ふ）いるではありませんか。すると、富士の山は龍にむかつて叫び（さけ）ました。「おまえは約束を忘れたのか。」

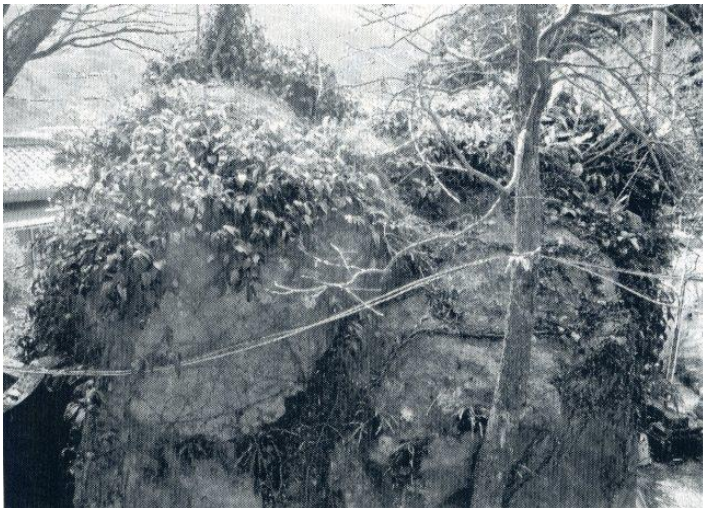
富士の山がいう約束とは、富士の山を守る山の番人（ばんにん）を龍が連れてくることになっていたのです。

さらに、富士の山は「龍よ、いつまで待たせるのだ。約束を守れないのなら伊豆の山々も火の海にしてやるぞ。」と言いだしました。そこで、龍は急いで天城の山にもどり、三兄弟の長男（ちやうなん）である太郎に富士の山の番人をまかせることにしました。

龍は太郎を背中にのせ、富士の山のもとに飛び、太郎といっしょに富士の山を守ることになりました。こうして、富士の山を守ることになった太郎は太郎坊（たろうぼう）と呼ばれ、また、天城に残り、伊豆の山の番人となった次郎と三郎は、万二郎（ばんじろう）、万三郎（ばんざぶろう）と呼ばれました。

龍が住んでいたホウキガ原の池の淵には、

龍が使ったといわれる大きな岩の枕が残りしました。その後、このホウキガ原に人が住みはじめ、やがて隆興というお坊さんがここにお寺を建てました。お寺はホウキガ原から大沢山に移されましたが、不思議なことに龍が枕に使った大きな岩も移っていったそうです。この石は「龍の枕岩」として大切にされ、龍淵院のお坊さんは、龍の大好きな甘茶をかけて祀っています。



(五) 白田・腰の神さま

湯ヶ岡の高羽家の庭先には、多くの石の塔があり、これらは大洞庵石塔群と呼ばれ、町の文化財に指定されています。この石塔群は、いつ、だれが、何のために建てたのかはわかっていませんが、次のようなお話が伝わっています。

昔、お百姓さんが「まさなおし」といわれる田んぼを作りかえる仕事をしていると、土の中からたくさんのお骨が出てきました。このあたりは、狩りですったイノシシやシカの骨を埋めたところなので、その骨だと思って石ころなどといっしょに道に敷いていました。ところが、しばらくすると、お百姓さんは急に腰が痛くなってきました。やっこの思いで家に帰ったのですが、腰の痛みはさらにひどくなるばかりです。布団に横になってどうして腰がいたくなったのか考えてみると、はっと思いました。「今日、イノシシやシカの骨

だと思って道に敷いた骨は、もしかしたら人の骨かもしれない。これはたいへんなことをしてしまった。」

もう日は沈み、あたりはすっかり暗くなっていました。しかし、お百姓さんは腰の痛みをこらえ、おばあさんの肩につかまりながら、骨を敷いたところまでいきました。そして、灯をたよりに骨を拾い集め、もとのところにおさめました。すると、あんなに痛かった腰の痛みがすっかり消えてなくなったのです。

この骨は戦いに負けて亡くなったお侍の骨かも知れないと思ったお百姓さんは、そこにお墓を建ててこの骨をおさめ、ていねいに供養をしました。それからこの話は村中に広まり、村人からは「腰の神さま」として祀られるようになったそうです。

(六) 稲取・はさみ石と仲鎮山^{ちゅうちんやま}

稲取の黒根^{くろね}の先にあるトモロ岬から稲取寄りの約一〇〇メートルの磯^{いそ}には、二つの大きな石が立っています。この二つの石は、高さが約十メートル、周囲は約二十メートルある大変大きなものです。また、この二つの大きな石の間には、幅二メートルくらいの石が落ちないようにはさまっていることから「はさみ石」といわれています。

はさまっている石は、両側の大きな石と同じ種類の石ですから、どちらかの石から崩れた石がはさまったのではないかと考えられています。このように「はさみ石」は大変めずらしい石です。「はさみ石」やその周りについて

昔、稲取と白田の村の境^{さかい}のあたりの海は、サザエやアワビなどの貝や、伊勢エビなどがたくさん取れたので、二つの村は村の境をめぐって争っていました。

二つの村は、大変長い間争いをしていたため、神さまが心配して天城^{あまぎ}の万二郎^{ばんじろう}天狗^{てんぐ}と万三郎^{ばんざろう}天狗^{てんぐ}の兄弟の天狗に「争いを鎮^{しず}めてこい。」と命^{めい}じました。天狗の兄弟は、両方の村人たちを天城^{ふもと}の麓にある山に呼び、村人たちに争いをやめる話し合いをさせました。天狗たちは、両方の村人に「村境^{むらざかい}のことで争って

話して聞かせました。」と

そこで両方の村人たちは、それぞれの村のために熱心に話し合いをしました。話し合いは、なかなかうまくは進みませんでした。三日目になってようやく村境に石を置いて境にすることが決まりました。

しかし、小さい石だと動いてしまい、また争いになってしまふとの話が出ました。すると、天狗たちは天城山から大きな石を二人で力を合わせて運び出し、境の石にしました。

この石は大変大きな石で、「かぐら」のような形をしていることから、村人たちは「かぐ

ら石」という名をつけました。また、二人の天狗は、村の境に「かぐら石」を置いた記念に、これも人では運べない大きな屏風びょうぶのような石を二つ運び、境から稲取寄りに置きました。この石は、人が両手りょうてをあわせるように立て、その間あいだに大きい石を落さないようにはさみました。

この石には、稲取と白田の両方の村が仲よく助けあうようにという天狗の兄弟の願ねがいがこめられ、「はさみ石」と名をつけました。また、両方の村人たちが話し合った山を、村の争いを鎮めて仲直りをしたことから「仲鎮山」と名をつけたと伝わっています。

「はさみ石」は、天狗の兄弟が運んできたという言い伝えがある不思議な石です。いつまでも昔話とともに大切に守っていききたいものです。



(七) 稲取・お舟石^{ふねいし}

稲取の志津摩^{しづま}の海岸には散歩のための道が続いていますが、この道を歩いていくと、海に大きな石が見えます。この大きな石は、「お舟石」といわれ、次のようなお話が伝わっています。

昔、稲取の入谷^{いりや}におじいさんとおばあさんが住んでいました。夏の初めのある日のこと、おじいさんとおばあさんは、気持ちよい海の波の音に誘^{さそ}われて、杖をつきながら志津摩川を海へと下つていきました。海岸に着いた二人は、目の前に広がるまっ青な海を眺^{なが}め、気持ちのよい海からの風に着物の裾^{すそ}をなびかせながら海を見ていました。

やがて、二人はお弁当を食べようと思い、食べる場所を探し始めました。そして、波打^{なみう}ち際の大きな石の近くにある松の木の根元で食べることにした二人は、そこでお弁当を仲良く食べました。

まもなく、お弁当を食べ終えたおじいさんは、大きな石に近づく、ひよいと石の上に登りました。おばあさんはお弁当を食べながら、その様子をニコニコしながら眺めていました。

すると、おじいさんが大声で、「おばあさん、大変だ。わしの乗っているこの大石が陸のほうへ向かって動き出しているぞ。」と叫びました。おばあさんはびっくりして、あわてて石によじ登りました。

(これは、きっと海の神さまの仕業^{しわざ}に違いない。)そう思った二人は、石の上に座って両手を合わせ、石が無事に止まるように祈りました。

しばらくすると、石が動かなくなつたので、二人はほっと胸をなでおろし、石の上に座つたまま、あれやこれやと語り合いました。

そのうちに、おじいさんはおばあさんを石の上に残したまま、家に持ち帰る貝をとり始めました。おばあさんは、お弁当を食べた後

で眠^{ねむ}くなり、そのまま石の上で眠ってしまいました。おじいさんの腰のスカリが貝でいっぱいになったころ、「おじいさん、たすけてー。石が海にむかつて動き出したよー。」というおばあさんの叫び声が聞こえてきました。おじいさんは、大急ぎで走って戻り、石からおばあさんを助け下ろしました。そして、二人は「これは、海の神さまのお怒^{いか}りだ。」と海に向かって手を合わせ、海の神さまに一所懸命に祈りました。

このことがあってから、稲取の人々はこの石のことを、「男が乗れば陸に向かい、女が乗れば海に向かって走るお舟石だ。」というようになりました。

また、「お舟石」には、次のような話も伝わっています。昔、役小角^{えんのおづぬ}という行者^{ぎょうじや}が伊豆の大島に流されるといふ罰^{ばつ}を受けました。大島に流された小角は、夜になると大島を抜け出して、富士山などで修行^{しゆぎやう}をしたそうです。そのときにこの「お舟石」に乗って、大島から

海を渡って来たといわれています。また、小角は大島から「お舟石」に乗って稲取にやって来ると「お舟石」近くの洞窟^{どうくつ}に住んだともいわれています。役小角のお話はいろいろな所に伝わっていますが、この「お舟石」のお話のように伊豆には多くのお話が伝わっています。



（八）稲取・はんまあさま

稲取では、九月八日に「はまゆうの葉」で武士の人形や、サンマやイカなど魚を形どつたものを作ります。この葉で作った武士の人形や魚などを家の床の間で一日祀り、次の日に海に流します。このときに「サンマやイカになつて帰つてこらっしえーよ。」と泣きながら流し、魚がたくさんとれることを祈る行事があります。

この行事は「はんまあさま」といわれますが、「はんまあさま」と呼ばれる理由は「はまゆう」がなまつたものともいわれています。また、この行事は九月九日に行われますが、三月三日の半年後に行われていることや、人形を流すことから「ひな祭り」と関係するな

どともいわれています。この行事は、稲取にしか伝わっていない大変めずらしい行事です。このため国から平成十四年（二〇〇二年）に「記録作成等の措置を

講ずべき無形の文化財」に選ばれています。「はんまあさま」には、次のようなお話が伝わっています。

昔、稲取が小さな漁村であつたころのお話です。その年は、漁師たちが魚を釣りに行つてもまったく釣れず、ぼんやりと海を見る日が続きました。

そんなある日、漁師が海を見ていると沖にたくさんのカモメが群れて飛んでいました。カモメがたくさん飛んでいるのは、その下でたくさん

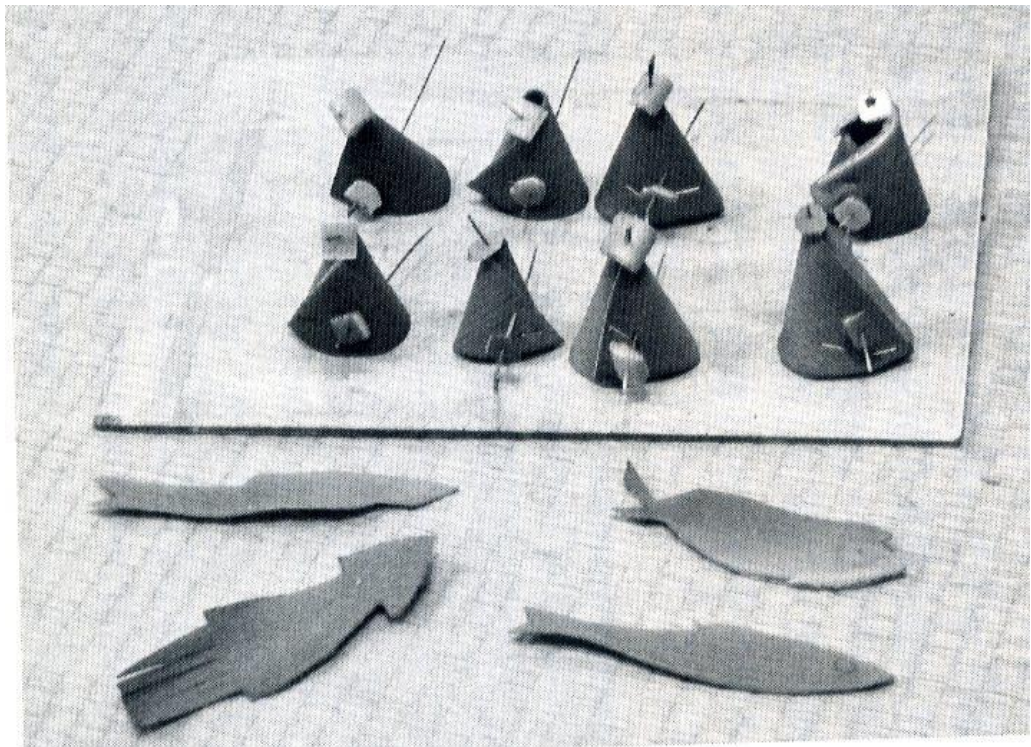
の魚が集まっている目印であり、これは「とりやま」といわれています。

「とりやま」を見つけた漁師たちは、久しぶりにたくさん

ちはがっかりしました。しかし、そうかとい
ってこのまま港に帰るわけにはいきません。
なぜなら漁師は海で亡くなった人を見つけた
ら、陸まで運んでお墓などに祀り、供養する
ことになっていたので。

そこで漁師たちは、「今、みんな漁がなくて
困っている。今日も「とりやま」だと思って
きたが、大勢の仏様だ。だが、この仏様をこ
のままにしておくわけにもいかねえ。みん
なで手厚く葬^{ほうむ}ってやるべえ。」といって、亡く
なった武士たちを陸まで運び、お墓を建てて
供養しました。

それから稲取ではサンマとイカがたくさん
取れるようになりました。漁師たちはこれを
喜び、毎年、浜にあるはまゆうの葉で武士や
サンマ、イカを形どった人形を作り、家の床
の間にお酒や柏餅^{かしわもち}を供えて祀り、次の日に泣
きながら唱えごとをして流すようになったと
のことです。



（九）稲取・源為朝の旗（院宣の旗）

稲取には、平安時代終わりに京都での戦いに敗れた源為朝の子孫が移り住んだという言い伝えがあります。保元元年（一一五六年）に、京都では天皇家、貴族の藤原氏、武士の源氏や平氏が入り乱れて戦った保元の乱という戦いがありました。この戦いで、為朝は崇徳上皇に味方をして戦いましたが、戦いに敗れて捕まり、罰として伊豆の大島に流されました。

その後、為朝は島の人に乱暴をしたり、伊豆の島々を奪ったりしました。このため、嘉応二年（一一七〇年）に為朝を討ち取るための兵が送られ、為朝はこの戦いで亡くなったとされていますが、琉球（沖縄）に逃げたなどの話も伝わっています。

この戦いの時に、為朝の子供の源為家は家来といっしょに島から逃げたといわれています。島から逃げてきた為家は、今の神奈川県

のあたりに住み、富岡の名前を名乗りました。その後、その子孫たちが稲取に住むようになったといわれています。また、この言い伝えとともに、源為朝が書いたとされる旗が稲取に伝わっています。

この旗は、「源為朝の旗」や「院宣の旗」などと呼ばれ、村木家に掛け軸にされて伝わっています。旗は、縦が約八十センチ、横は約二十六センチの大きさの絹の布に、真ん中に「崇徳天皇尊神」、右下に「為義」、左下に「為朝」と書かれています。為義とは、為朝のお父さんであり、保元の乱で為朝といっしょに戦いましたが、戦いに敗れた後に罰として殺されています。

江戸時代の寛政五年（一七九三年）に、老中（江戸幕府の将軍を助ける役職）を務めた松平定信が伊豆を見て回った時に、村木家に寄ってこの旗を見ています。このとき、松平定信は「この旗は大変めずらしいものなので、大切にするように。」と言っています。

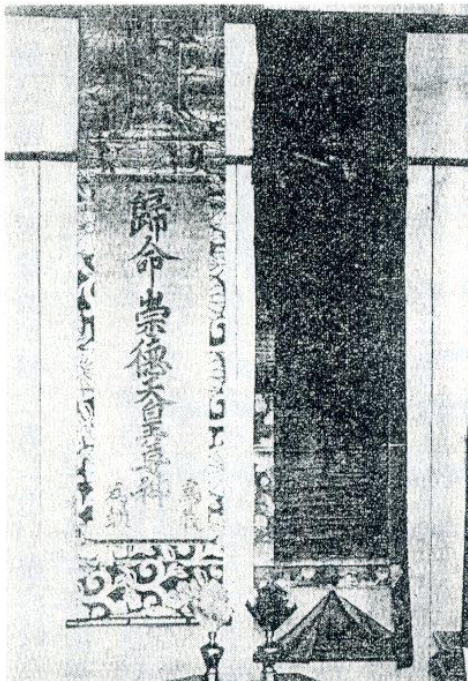
また、お供^{とも}の人にこの旗を書き写させて、これを村木家に与えました。そして、「これからはこの旗は大切に、見に来た人には写したものを見せるように。」と言っています。

この旗については、源為朝が書いたものではないという説があります。これは旗の中央に書かれた「崇徳天皇尊神」の「崇徳」という号^{ごう}は、治承^{ちしょう}元年（一一七七年）に送られたものであり、為朝が書いたとすると年が合わないというものです。また、旗の大きさが当時の旗の大きさに合わないことや、旗を見た松平定信がめずらしい書や絵などをまとめた『集古^{しゅうこ}十種^{じっしゅ}』という本にこの旗を載^のせていないことなどからです。

しかし、この旗を為朝本人が書いたかどうかは別にして、稲取の歴史を語るうえでは、為朝の子孫が移り住んだという言い伝えを伝えていく必要があります。また、この旗が伝わっていることは、為朝の子孫などが稲取で為朝のことを語り継いでいこうとする思いが

あったのかも知れません。

稲取には、いくつかの神社がありますが、そのなかで八幡^{はちまんじんじや}神社は稲取全体を守る神社とされています。八幡神社は、稲取を拓^{ひら}いた神様である穂都佐^{ほつさ}和氣^{わけ}命^{のみこと}と、源氏の守り神である誉田^{ほんだ}別命^{わけのみこと}がまつられています。この誉田別命がまつられるようになったのは、為朝の子供の為家がかかわっているという言い伝えがあり、このことも源為朝・為家親子と稲取のかかわりを伝えていきます。



(十) 稲取・天下御免の旗

稲取の東区の上島（上嶋）家には、江戸幕府を開いた徳川家の家紋である三つ葉葵の旗が伝わっています。この旗は、江戸幕府の許しを受けた特別な船であることをあらわすといわれています。この旗掲げた船が港に入ると、ほかの船は約一三五メートル以内には近づいてはいけないといわれました。この旗には、次のような言い伝えがあります。

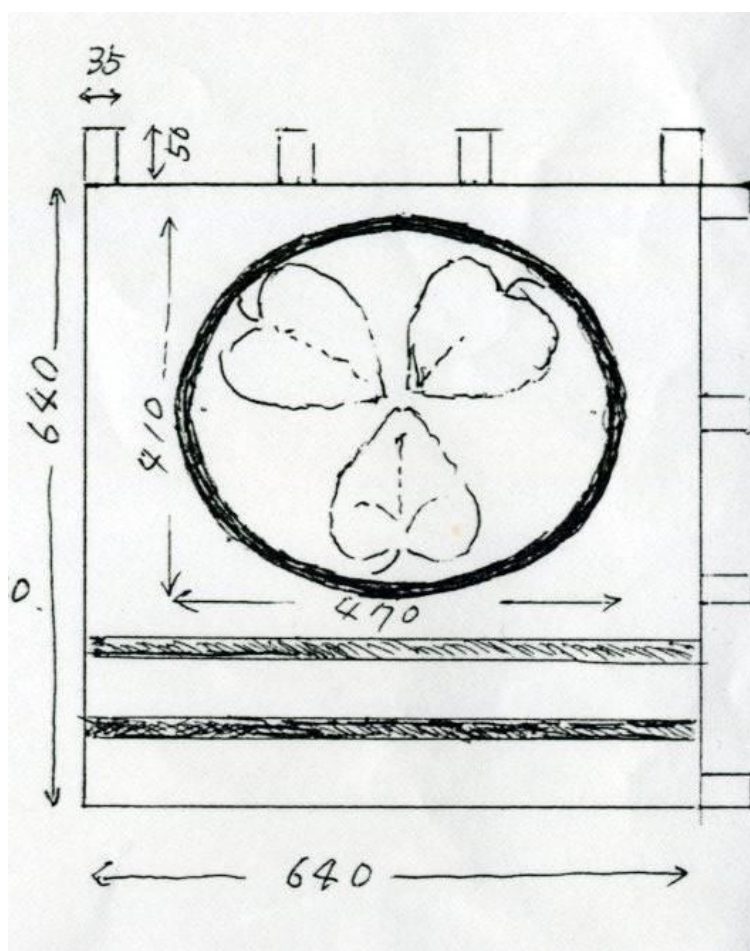
慶長十九年（一六一四年）から次の年にかけて、江戸幕府を開いた徳川家康は、大坂城の豊臣氏を滅ぼすための戦いをしました。この戦いは、大坂冬の陣、夏の陣といわれます。この戦いの時、稲取の船は江戸幕府のためにお米などの食糧を運ぶことを頼まれました。しかし、戦いに船を出すことは危険なため、誰も行こうとしません。そこで、どの船で誰が行くかを決めるため、八幡神社にみんなが集まり、くじを引くことになりました。この

くじ引きにより、上島家のご先祖が江戸幕府のために食糧を運ぶことになったと伝わっています。

戦いは、江戸幕府が勝ちました。幕府は、戦いに協力をした上島家に何かご褒美を与えようとしたが、上島家はそのときは何も望みませんでした。

戦いが終わり平和な世になると、上島家の船はあちこちの港に荷物を運びました。しかし、船が小さかったため、じゃまをされたりして『なかなか港に入れてもらえないことがありました。そこで、江戸幕府に協力をしたことを思い出し、江戸幕府に許しをもらった特別な船であることを認めてほしいとお願いをしました。

すると、徳川家の紋が入ったこの旗が江戸幕府から与えられたとのことでした。この旗により、上島家の船は、どの港でも自由に入ることができるようになったと伝わっています。



(十一) 稲取・市、ぼうされ

昔から天狗にまつわるお話は、いろいろと伝わっています。その中で、稲取では市太郎という子供が稲取岬で体験した「市、ぼうされ」というお話が伝わっています。

ある日、市太郎と妹のおさわの二人は、竜宮神社のある稲取岬で遊んでいました。ところが、急に日が暮れて真っ暗になってしまったので道が見えなくなり、家に帰れなくなってしまいました。二人は怖くなって動けなくなり、その場で泣くばかりでした。

するとどこからか天狗がやってきて、「どうした。」と市太郎に話しかけました。市太郎は、怖かったのですが、自分と妹の名前や、急に暗くなって家に帰れなくなったことなどを泣きながら天狗に話しました。

それを聞いた天狗は、「そうか、それはかわいそうに。よしよし、もう泣くな。おれが家まで連れて行ってやろう。」と言って二人の子

供に大きな背中を向けると「市、ぼうされ。さわ、ぼうされ。」と子供たちを背中におんぶしました。天狗が「目をつぶれ。」というと、二人は目をぐっとつぶりました。そして、気がつくと二人は、自分たちの家の近くの道に立っていたそうです。

竜宮神社のある稲取岬には、このような不思議なお話がいくつか伝わっています。



参考資料

稲取細野高原の山野草（一部）

シダ植物

クラマゴケ、ヤマドリゼンマイ、ゼンマイ、ワラビ、ベニシダ、クマワラビ、ヒメシダ

双子葉植物 離弁花類

ヤナギ科	ヤマナラシ
イラクサ科	ヤブマオ、カラムシ
タデ科	ミズヒキ、アキノウナギツカミ、イタドリ、スイバ（スカンボ）
ナデシコ科	カワラナデシコ、ハコベ
ヒユ科	イノコズチ
キンポウゲ科	ヤマトリカブト、ヒメウズ、サラシナショウマ、センニンソウ、ウマノアシガタ キツネノボタン、アキカラマツ
メギ科	メギ
アケビ科	アケビ、ミツバアケビ
スイレン科	ジュンサイ
ドクダミ科	ドクダミ
センリョウ科	フタリシズカ、ヒトリシズカ
ウマノスズクサ科	アマギカンアオイ、ランヨウアオイ、カンアオイ、オオバノウマノスズクサ
マタタビ科	サルナシ
オトギリソウ科	オトギリソウ、ミズオトギリ
モウセンゴケ科	モウセンゴケ
ケシ科	タケニグサ（チャンパギク）
アブラナ科	タネツケバナ
ベンケイソウ科	ヒメレンゲ
ユキノシタ科	チダケサシ、イワボタン、ウツギ、マルバウツギ、コアジサイ、コガクウツギ ヤマアジサイ、タマアジサイ、アマギアマチャ、ウメバチソウ
バラ科	キンミズヒキ、ヘビイチゴ、ダイコンソウ、ミツバツチグリ、キジムシロ カマツカ、マメザクラ、イノバラ、テリハノイバラ、クサイチゴ、フユイチゴ ニガイチゴ、モミジイチゴ、ナワシロイチゴ、ワレモコウ、コゴメウツギ
マメ科	メドハギ、ハイメドハギ、マルバハギ、ネコハギ、ヌスビトハギ、クズ、フジ ノササゲ、クララ、カラスノエンドウ
カタバミ科	カントウミヤマカタバミ、カタバミ
フウロソウ科	ゲンノショウコ
トウダイグサ科	エノキグサ、トウダイグサ、ナツトウダイ、タカトウダイ
ミカン科	サンショウ、イヌザンショウ、マツカゼソウ、ミヤマシキミ
ヒメハギ科	ヒメハギ
ツリフネソウ科	キツリフネ、ツリフネソウ
ニシキギ科	ツルウメモドキ、ツリバナ、マユミ
ブドウ科	ノブドウ、ヤブカラシ、エビヅル
ジンチョウゲ科	オニシバリ、コガンピ
グミ科	ナツグミ
スミレ科	ナガバノスミレサイシン、タチツボスミレ、サクラスミレ、ニオイタチツボスミレ フモトスミレ、スミレ
ウリ科	アマチャヅル、カラスウリ、キカラスウリ
アカバナ科	ミズタマソウ、アカバナ、メマツヨイグサ、コマツヨイグサ
アリノトウグサ科	アリノトウグサ
セリ科	ミシマサイコ、ツボクサ、セントウソウ、オオチドメ、イブキボウフウ、ヤブジラミ ミツバ、ノダケ、シシウド

双子葉植物 合弁花類

イチヤクソウ科	イチヤクソウ
ツツジ科	ヤマツツジ、ネジキ
サクラソウ科	オカトラノオ、ヌマトラノオ、コナスビ
ハイノキ科	サワフタギ
モクセイ科	イボタノキ、オオバイボタ

リンドウ科	リンドウ、コケリンドウ、フデリンドウ、アケボノソウ、センブリ、ツルリンドウ
キョウチクトウ科	テイカカズラ
ガガイモ科	フナバラソウ、イヨカズラ、ガガイモ、スズサイコ
アカネ科	ヤエムグラ、ヘクソカズラ、アカネ
クマツヅラ科	ムラサキシキブ、クサギ
シソ科	キラソウ、ツクバキンモンソウ、クルマバナ、ナギナタコウジュ、テンニンソウ ヒメシロネ、ヒメオドリコソウ、ヒメハッカ、ヤマハッカ、ヒキオコシ、ウツボグサ アキノタムラソウ、キバナアキギリ
ゴマノハグサ科	イズコゴメグサ、シオガマギク、タチイヌノフグリ、オオイヌノフグリ
キツネノマゴ科	キツネノマゴ
ハマウツボ科	ナンバンギセル、オオナンバンギセル
タヌキモ科	ミミカキグサ、タヌキモ、ホザキノミミカキグサ
オオバコ科	オオバコ
スイカズラ科	ツクバネウツギ、スイカズラ、ニワトコ、ガマズミ、ヤブデマリ、ハコネウツギ ニシキウツギ
オミナエシ科	オミナエシ、オトコエシ
マツムシソウ科	マツムシソウ
キキョウ科	ツリガネニンジン、ホタルブクロ、ヤマホタルブクロ、ツルギキョウ、ツルニンジン (ジイソブ)、バアソブ、タニギキョウ、キキョウ
キク科	ヨモギ、ノコンギク、ヤマシロギク、シラヤマギク、ヨメナ、センダングサ、ヤブタバコ ガンクビソウ、ノアザミ、キセルアザミ、オオアレチノギク、リュウノウギク ヒヨドリバナ、サワヒヨドリ、ツワブキ、ハハコグサ、チチコグサ、チチコグサモドキ カセンソウ、ニガナ、ジシバリ、アキノノゲシ、ムササキニガナ、センボンヤリ マルバダケブキ、フキ、コソゾリナ、ミヤコアザミ、キクアザミ、ハンゴウソウ オカオグルマ、サワギク、タムラソウ、アキノキリンソウ、ハルノノゲシ、オヤマボクチ ヒロハタンポポ (トウカイタンポポ)

単子葉植物

ヒルムシロ科	ヒルムシロ
ユリ科	ノビル、ヤマラッキョウ、アマナ、チゴユリ、ヤマユリ、ササユリ、コオニユリ ヒメヤブラン、ノギラン、アマドコロ、ツルボ、サルトリイバラ、ホトトギス ヤマホトトギス
キンバイザサ科	コキンバイザサ
ヤマノイモ科	イズドコロ、ヤマノイモ、ヒメドコロ、オニドコロ
アヤメ科	ニワゼキショウ、シャガ
イグサ科	スズメノヤリ、ヤマスズメノヒエ
ホシクサ科	シロイヌノヒゲ
イネ科	タチカモジグサ、スズメノテッポウ、メリケンカルカヤ、トダシバ、コバンソウ ヒメコバンソウ、ヤマアワ、オガルカヤ、メヒシバ、シナダレスズメガヤ オニウシノケグサ、チガヤ、チゴザサ、ススキ、チヂミザサ、エノコログサ ホソバテンナンショウ、マムシグサ
サトイモ科	カンスゲ、ゴウソ (タイツリスゲ)、ヒメクグ、シカクイ、ミカドシカクイ (ミツカドシカクイ)、ヤマイ、コマツカサススキ、ホタルイ、アブラガヤ
カヤツリグサ科	ハナショウガ
ショウガ科	エビネ、キンラン、シュンラン、クマガイソウ、サワラン (アサヒラン)、カキラン
ラン科	サギソウ、ミズトンボ、ムカゴソウ、ミズチドリ、ヤマサギソウ、コバノトンボソウ トキソウ、ヤマトキソウ、ネジバナ、トンボソウ

東伊豆町には、細野高原のような野原や湿原だけでなく、海岸近くや畑、道ばた、町の広場や山地の林内や崖地、そして天城山のような深山などに、まだ沢山の植物があります。なかには絶滅が心配される種類も少なくありません。私たちのふるさとは人間だけでなく、植物も昆虫、野鳥なども、共に生きています。ふるさとの自然や生き物たちを大切に守って、いつもまでも共に暮らしていきたいものです。

《東伊豆町の遺跡と時代》

1982年 1000 紀元 -1000年前 -2000 -3000 -4000 -5000 -6000 -7000 -8000 -9000 -10,000 -11,000年前

歴史時代	弥生時代	縄文時代晩期	縄文時代後期	縄文時代中期	縄文時代前期	縄文時代早期	無土器(先土器)時代 旧石器時代ともいう
------	------	--------	--------	--------	--------	--------	-------------------------

- 茶の平Ⅱ遺跡(稲)
- 崎町遺跡(稲)
- 天神原遺跡(稲)
- 中の平遺跡(稲)
- 志津摩遺跡(稲)
- 茶の平遺跡(稲)
- 天神原遺跡(稲)
- 宮田遺跡(天)
- 大久保遺跡(天)
- 西ヶ原遺跡(天)
- どろかん山遺跡(天)
- あざみ原遺跡(天)
- 栗畑遺跡(天)
- 細野遺跡(天)
- 穴の沢遺跡(天)
- 松峯遺跡(天)
- 峠遺跡(天)
- 石上遺跡(稲)
- 峠遺跡(天)

- 稲取ゴルフ場遺跡(稲)
- 荒巻遺跡(稲)
- 茶の平遺跡(稲)
- 宮後遺跡(白)
- 茶の平遺跡(稲)
- 稲取ゴルフ場遺跡(稲)
- 茶の平遺跡(稲)
- 長坂山遺跡(稲)
- 向三目遺跡(稲)
- 大久保遺跡(天)
- 吉城山遺跡(天)
- 天神原遺跡(天)
- 吉久保遺跡(天)
- 長坂山遺跡(天)
- 向三目遺跡(天)

稲は稲取 白は白田 念は奈良本 天は大川 ■印は県指定重要遺跡 ○印は消滅してしまったもの

東伊豆町にはたくさんさんの遺跡があります。古いものでは稲取ゴルフ場遺跡や荒巻遺跡のように10,000年以上前の石器時代のものから 約1,000年前の茶の平(監)遺跡まで長い時代にわたって分布していきます。しかし昭和45年頃から私たちの町も、あちらこちらで大小の開発工事が行われ奈良本の峠遺跡のような静岡県にとつて、大へん貴重ないくつかの遺跡がこわされたりなくなりました。失なつた遺跡はもどってきません。かつてに掘つたりせず、みんなで大切にしましょう。

※遺跡とは……古代人が生活をしたところで、使われた土器や石器、骨角器(こつかくき)がでてくる。このような発掘品は歴史を調べる上で大へん重要なものである。

吉久保遺跡	縄文	縄文土器, 石斧(磨製石器)
長坂遺跡	縄文(中期)	縄文土器, 石鏃, 石斧(磨)
あざみ原遺跡	"(")	縄文土器
細野遺跡	"(")	石鏃
石上遺跡	弥生(後期)	弥生土器
松峯遺跡	縄文(前期)	縄文土器
	"(")	石鏃

【縄文式土器と弥生式土器のちがい】

縄文式土器	弥生式土器
手づくねによる厚手	製法
低い	ろくろの使用
黒褐色	薄手
焼成度	高い
色彩	赤褐色又は淡褐色
文様	単純, 櫛描文, 無文, 幾何学紋様

○石鏃(せきぞく) ……黒よう石や石などでつくつた矢じり。石斧(せきふ) ……石でつくつたおの

東伊豆町埋蔵文化財包蔵地

遺跡名	時代	所在地	地目	出土品
梅ヶ山遺跡	縄文	大川梅ヶ山837-2	台地	縄文土器・黒曜石片
吉城原遺跡	縄文(中)	大川吉城原716 他	畑地	縄文土器・石斧(打)・石棒・勾玉
宮田遺跡	縄文	大川宮田79 他	〃	縄文土器・石棒・石鏃
広前遺跡	縄文	大川広前298～306 他	〃	縄文土器・石斧
藤沢遺跡	縄文	奈良本藤沢1468～1470	〃	石鏃
峠遺跡	縄文(早・前)	奈良本峠1244 他	山林	縄文土器・石鏃・石皿
ドウカン山遺跡	縄文	奈良本ドウカン山1315 他	〃	〃
大久保遺跡	縄文(中)	熱川大久保1271 他	〃	〃
西ヶ原遺跡	縄文	奈良本西ヶ原	畑地	〃
宮後遺跡	縄文(前・中)	白田宮後90～130 他	〃	縄文土器・石斧(磨)・石棒・石臼・石鏃
松峯遺跡	縄文(前)	稲取松峯3325 他	原野	縄文土器・石鏃
石上遺跡	縄文(前)	稲取石上3322 他	〃	〃
アザミ原遺跡	縄文(中)	稲取アザミ原3157～3160	畑地	〃
細野遺跡	縄文(中) 弥生(後)	稲取細野3148 他	〃	縄文土器・石鏃・弥生土器
大洞遺跡	縄文(中・後)	稲取入谷大洞2630 他	畑地	縄文土器
荒巻遺跡	先土器	稲取荒巻3220～3224	山林	尖頭器
茶の平遺跡	縄文(早～中)	稲取茶の平3250 他	畑地	縄文土器・石鏃・石斧等
茶の平Ⅱ遺跡	平安	稲取茶の平3243 他	畑地	土師器・平安土器
長坂遺跡	縄文(中)	稲取入谷飯盛山長坂2453 他	〃	縄文土器・石鏃・石斧(磨)
吉久保遺跡	縄文	稲取吉久保2912～2914	〃	縄文土器・石斧(磨)
志津摩遺跡	縄文	稲取志津摩2163 他	〃	石斧(磨)・石鏃
上の山遺跡	縄文(中)	稲取上の山149 他	〃	縄文土器・石鏃
前ノ田遺跡	縄文	稲取前ノ田564, 566, 567	〃	石棒・石斧(磨)・石皿
天神原遺跡	縄文(中) 弥生(後) 古墳	稲取天神原402～408	〃 宅地	縄文土器・石鏃・石皿・石斧 弥生土器・土師器
崎町遺跡	弥生 古墳	稲取崎町	宅地	弥生土器・土師器・土鍾
向三十目遺跡	縄文	稲取向三十目	畑地	縄文土器・石斧・石鏃
穴の沢遺跡	縄文(早・前)	奈良本穴の沢	山野	縄文土器・石皿・磨製石器
向山遺跡	縄文	稲取向山	畑地	縄文土器
下平塚遺跡	縄文	稲取平塚	〃	石鏃・土師器・須恵器
二ツ堀遺跡	縄文	稲取入谷	〃	縄文土器・石斧(磨)
大久保遺跡	縄文	稲取入谷	〃	縄文土器・石鏃・石匙
中峯遺跡	縄文(前)	稲取中峯	〃	縄文土器・石斧・石皿

(4) 指定文化財

		名称	所有者	所在地	種別	内容	指定年月日	備考
県指定	1	済廣寺のカヤ	法人	稲取	天然記念物	根廻り 6.0m 目通り 5.0m 樹高 18.0m 枝張り 17.0m	昭 40. 3. 19	
	2	シラヌタの池とその周辺の生物相	国	天城山奈良本入	天然記念物 (総合)	モリアオガエルの生息地とその周辺の生物相	昭 46. 8. 3	0. 52 ㍎
	3	細野湿原	東伊豆町	稲取	天然記念物	稲取泥流層と大峯山の接点に生じた湿原で、湿原植物が自生する。	平 8. 3. 12	
						稲取泥流層と大峯山の接点に生じた湿原で、湿原植物が自生する。		
						稲取泥流層と大峯山の接点に生じた湿原で、湿原植物が自生する。		
						稲取泥流層と大峯山の接点に生じた湿原で、湿原植物が自生する。		
	4	シラヌタの大スギ	国	天城山奈良本入	天然記念物	推定樹齢 1,000 年以上、根廻り約 10.5m、目通り約 8.55m、樹高約 40m、枝張り東西約 22.0m、南北約 23.3m	令 3. 4. 2	
町指定	1	横ヶ坂の松	個人	稲取	天然記念物 (庭園樹)	模様直幹庭園樹 推定樹齢 150 年 芸術的価値が高い。	昭 54. 7. 27	
	2	山田大家の松	個人	稲取	天然記念物 (庭園樹)	模様直幹庭園樹 推定樹齢 250 年 樹高 6m 枝張り 4m	〃	
	3	鳳凰の松	個人	稲取	天然記念物 (庭園樹)	模様直幹庭園樹 推定樹齢 200 年 一の枝張り 8m	〃	
	4	シダレザクラ	個人	大川	天然記念物 (庭園樹)	単弁花で純粋種 推定樹齢 400 年以上 樹高 8m 枝張り 5.5m 形状良	〃	
	5	西堂 山駕籠	法人	稲取	工芸	江戸中期の建長寺派高僧の使用した物。工芸的価値高い。	〃	
	6	穴ノ沢遺跡	個人	奈良本	埋蔵文化財 (有形文化財)	縄文時代前期と推定される土器 (硬度が高い) 等を多量に埋蔵する。	〃	
	7	鹿島踊	個人	奈良本	無形民俗芸能	鹿島神社祭礼の踊り 4 例の内、最南限中世以来の原型が残る。	〃	
	8	三番叟	団体	稲取	無形民俗芸能	伝統的子供三番叟。技術・衣装	〃	
	9	畳石	個人	稲取	史跡	慶長年間江戸城修築に用いた築城石の内 2 個が海岸に残されたもの。	昭 55. 7. 25	
	10	ぼなき石	団体	大川	史跡	里人から古来「ぼなき石」と呼ばれ名物扱いされている。	〃	
	11	築城石 (角石)	個人	大川	史跡	大川谷戸山間に残された巨大な築城石の完成品	〃	
	12	引幕	東伊豆町	稲取	工芸	江戸時代後半、江戸魚河岸間屋衆から稲取若衆へ寄贈された村芝居用の舞台引幕	〃	
	13	稲取灯台	東伊豆町	白田	史跡	明治 42 年稲取漁業協同組合と稲取村が建造した洋式石造灯台。海拔 130m	昭 57. 9. 13	復元完成昭 60. 3. 25
	14	話し合いの記録 16mmフィルム (稲取婦人会のあゆみ)	東伊豆町教育委員会	稲取	歴史 (有形文化財)	全国各地で実施された「話し合い活動」に焦点を合わせ、この運動の代表的な稲取にカメラをすえて、3 年間に渡る話し合い活動の姿をセミドキュメンタル形式に再現したもの。戦後の日本の婦人学級の出発点。	昭 62. 4. 1	北欧映画社より寄贈される
町指定	15	大川・三島神社棟札	団体	大川	歴史 (有形文化財)	・享徳 3 年戊戌月 17 日 ・明応 9 年庚申霜月初 6 日 ・大永 4 年甲申年 2 月 24 日 以上 3 点。 棟札の裏面は、室町・戦国時代の貴重な記録である。	昭 63. 4. 1	
	16	舩石 (もやい石)	法人	稲取	史跡 (産業遺跡) (有形文化財)	何時頃から石に穴をあけ、ぼう石として使用し始めたかは不明。言い伝えでは、真イルカ追い込み漁や縄船の停留に使われたという。イルカ漁から見ると、捕鯊供養塔には文政十丁亥年 (1827 年) と刻まれている。縄船漁から見ると、最盛であった大正期に使用されたものと思われる。	平元. 4. 1	3 個

(4) 指定文化財

	名称	所有者	所在地	種別	内容	指定年月日	備考
17	稲取水力発電所跡	個人	稲取	史跡	発起人、請負人の刻まれた巨石、取水口、水路を通した堤、水路約 130m。明治 42 年 4 月、稲取水力発電所発起人会が議会で決議され、明治 44 年 3 月 5 日、稲取水力電気株式会社は資本金 25,000 円で創立された。この年、412 戸の家庭に 718 灯が点灯されている。発電機はドイツのシーメンス社製。	〃	
18	ホルトノキ	個人	稲取	天然記念物	照葉樹林に生える常緑高木。若枝は淡黄褐色の毛があるが、まもなく脱落して無毛となる。葉はやや革質倒披針形、長楕円場披針形、長さ 6～12m、幅 1.6～3cm。根廻り 460cm、目通り 380cm、枝張り東西 31m・南北 22m、樹高 24m。	〃	
19	書院障子亀甲欄間	個人	稲取	工芸	書院障子と欄間にみられる細工、干網の構図やチリ返し三重亀甲の幾何学的な模様は、立体的に見せる工夫がなされ、その手法は見事であり貴重なものである。	〃	
20	大川・三島神社社殿正面と側面の彫刻	団体	大川	工芸	社殿正面の彫刻は、堂宮彫刻師で江奈村の石田半兵衛が嘉永 6 年に彫ったもので、蓑股（カエルマタ）には盃を持った老人と龍、向拝柱常備の象と獅子、虹梁下の鶴と鷺など繊細で見事な彫刻である。社殿側面の脇障子の彫刻は、稲取村の大工の棟梁・鈴木佐吉が彫ったもので、右側の立派な髯を蓄え薙刀を持った武将は中国の三国時代に劉備に仕えた勇将・関羽、左側で槍を持っている武将は同じく劉備に仕えた張飛。二体とも力強い彫刻である。	〃	
21	大洞庵石塔群	個人	白田	史跡	五輪塔、宝篋印塔の各パーツが乱積され中世の墓域の観を呈している。五輪塔 7 基以上、宝篋印塔 4 基以上あったと思われる。この中で完全な形を保っているのは中央の大型の五輪塔一基のみ、高さ 90cm、最大幅 33cm、火輪の上下の稜は平衡を保ちながら緩やかに反り立っている。	〃	
22	硫黄採掘の跡	国	天城山白田入	史跡 (産業遺跡)	寛延 2 己 8 年(1749 年)「乍恐口上書を以って申上候御事」にはじまり、公害訴訟の原点となっている。日本初の公害訴訟ではないだろうか。鉾口に近づくとも今でも硫黄の臭いが鼻をつく。硫黄採掘跡は産業遺跡として歴史的価値としても高い。	〃	
23	サラサドウダンツツジの群落	国	天城山系万二郎岳	天然記念物	ツツジ科の落葉樹。高さ 4～6m で、暖地に自生すると言われているが、天城山系の万二郎岳の中腹にあるサラサドウダンツツジは、稀にみる大樹である。	平 21. 4. 1	
24	稲取村木製水道管	東伊豆町	稲取	有形文化財 (歴史資料)	この木製水道管は、明治 24 年に旧稲取村が 1,200 円の工事費を計上し、沼津川の林の沢を水源として 800 間(約 1,454m) の水道を敷設した時のものである。この事業は、近代の水道敷設において横浜に次いで 2 番目とも言われている。水道敷設に尽力した初代村長の田村又吉や医師の西山五郎の優れた業績とともに、当時の造船や金属加工の高い技術を示している。	平 26. 10. 1	
25	東区道祖神（伝 八百比丘尼）石像	稲取東区	稲取	有形文化財（石造物）	この石像は、「伊豆型道祖神」と呼ばれる伊豆以外には例が少ない単体丸彫坐像のなかでもめずらしい意匠のものである。昭和初期の写真が民俗学者である折口信夫の『古代研究』国文学篇の扉に掲載されている。この本のなかで折口は、石像が手に椿を持っているとし、この石像を八百比丘尼の石像であるとしている。	〃	
26	大川区有文書	団体	大川	有形文化財（歴史資料）	元和・寛永時代の伊豆石丁場遺跡についての文献。大川の名主と大名家との築城石のやりとりが記されている貴重な文献である。	平 29. 4. 3	

— あとがき —

昭和六十二年に「わがふるさと」が発行されました。この冊子^{さつし}は、当時のふるさと学級を指導してくださった方々や文化財^{ぶんかざい}保護審議会^{ほごしんぎかい}委員^{いいん}の皆様^{みなさま}方の研究^{けんきゅう}、資料^{しりょう}をもとにしてつくられました。また、当時の東賀社会科^{とうがしゃかい}研修部^{けんしゅうぶ}の先生方のご協力もいただきました。

ここ数年で町の文化財など新しい発見が増えていく中、内容の見直しをおこない、昭和六十二年に作成された内容を大切にしながら、現在の東伊豆町文化財保護審議会委員の協力^{さいへん}で再編^{さいへん}をしました。また、小学校五年生^{ごねんせい}のみなさんになじみやすいように昔話や民話も新しく加えました。

この本には、私たちの祖先がそれぞれの時代をどのように生きていたか、どのように考えていたか、多くのお話のついでにいます。昔のことを知ることは、新しいことを知ることの手助けとなります。皆さんがこれを手にとって昔を知り、現在の自分たちの生活に活かしてもらえたらうれしく思います。

そして、この本で勉強したことをお父さんやお母さんに話してみてください。
お父さんお母さんにとっても、新しい発見がたくさんあると思います。家族みんな
で楽しんでもらえるような本になればと願っています。

東伊豆町教育委員会